

『大乘二十二問』の本文研究(一)

田 中 良 昭
宮 地 清 彦

序

『大乘二十二問』は、敦煌がチベット族の吐蕃に支配されたいわゆる吐蕃支配期（七八六―八四三）に、吐蕃王贊普が書面にて敦煌の学僧曇曠に仏教教理に関する二十二項目の問を發し、それに晩年の病中の曇曠が答えた問答体の教義問答書とされるものである。すなわちこの資料は、贊普の質問の背景にある当時のチベットの状況と、返答にみられる曇曠の学識を知る上で貴重な資料といわれ、現存するテキスト九種は、すべて敦煌から出現したいわゆる敦煌文献である点に特色がある。

曇曠に関しては、既に一九三一年に結城令聞氏によってその唯識思想に関心が持たれ、またこのテキストそのものについては、一九三七年に久野芳隆氏が「曇曠述大乘二十二問」と題する論文を『仏教研究』一卷二号に発表され、更に一九

五〇年代の後半には、芳村修基氏による研究成果が公にされる等、古くから西域仏教に関心を持つ研究者によって研究がなされてきたのであるが、この曇曠、そしてその門人の吐蕃僧法成に関する詳細にして大部な研究成果を^③発表し、学界に大きな波紋を投げかけたのが上山大峻氏である。すなわち曇曠に関しては、一九六四年、京都大学人文科学研究所の『東方学報』京都、三五冊、「敦煌研究」特集号に、「曇曠と敦煌の仏教学」と題する論文を発表され、後にそれは法成の研究をはじめとする敦煌の仏教学に関する諸論考と共に、一九九〇年、京都の法蔵館より『敦煌佛教の研究』と題する六七〇頁にも及ぶ大著として出版されている。

この著作の中で上山氏は、『大乘二十二問』に関し、まず巻頭の五〇種にのぼる口絵写真の図2に標題のあるS二六九〇の首部を、図3に尾題と奥付のあるS二六七四の尾部を示し、次いで曇曠の著作と足跡を述べる際に「晩年と『大乘二十二

問』を、諸著作を解説される際に『大乘二十二問』を挙げ、後者では写本九種と各問答の内容の要約が示され、巻末の「資料」では、八種の第一に本書を取り上げ、「一 校訂本文」と「二 訓読」を掲載する等、その研究は詳細を極めている。

一方、それに先立つこと十年の一九八〇年の八月、カナダのマニトバ大学で第十四回国際宗教学・宗教史学会が開催され、その際当時アメリカのアイオワ大学の教授であったP. Chow (巴宙) 教授とお会いし、知己となった。巴宙教授はその前年に当る一九七九年、『大乘二十二問』の英語訳註、輯校、輯校後記からなる“A Study of the Twenty-two Dialogues on Mahāyāna Buddhism”『大乘二十二問之研究』を台北のA Quarterly Review¹⁾と“The Chinese Culture”の一冊として出版されていたのであるが、学会のあった翌年の一九八一年二月、その一冊を送付していただき、その書評を日本の学会誌に発表してもらいたいとのご依頼を受けたのである。しかし当時の私は、この書を読んだこともなく、この書に関する知識は皆無に等しかったので、そのご要望に答えることができなかったことを大変申し訳なく思っている。実は近年、このテキストを大学院博士課程の研究指導で取り上げ、その際巴宙教授の英訳本も参照させていただいていることをお知らせしたところ、最近台湾の中華仏学研究所から改訂本を出版したから、是非それを参照するようにとのご返事をい

ただいた。そのような次第で、このテキストに関しては、上山氏による本文校訂とその訓読、巴宙氏による本文校訂とその英訳並びに訳註があつて、既に研究し尽くされている観がないわけではない。

ところで私は、大学院の研究指導でこのテキストを取り上げるに際し、当時博士課程の院生であつた現曹洞宗総合研究センター宗学研究部門の研究員である宮地清彦君に、上山氏の校訂本をふまえ、今一度すべてのテキストの写真による校合を実施してその異同を注記し、その読み下し(訓読)と出典を中心とした注記の原案を作成して提示することを求め、その原案をもとに他の参加者全員によるテキストの写真の拡大コピーを用いての本文の異同の確認と校訂文の作成、読み下し原案と出典等の検討を討論形式で実施し、全巻を読了した。その後更に、かつて筑摩書房から出版された『禪の語録』シリーズの体裁にならつて、現代語訳の必要性から、その原案の作成を今回発表の序と第一問から第十四問までの前半は宮地君に、それに続く第十五問から最後の第二十二問までの後半はその後に博士課程の院生となつた現研究生の近藤章正君に依頼し、現在後半の検討を実施中である。

従つて今回の発表は、前半の十四問までの各問毎に段落を設け、上段に校訂文、中段に読み下し文(訓読)、下段に現代語訳を対照して示し、その後本文校訂の異同を示す【校異】、

出典がある場合には【出典】、そして【語注】という順で掲載することとし、後半については次回に発表の予定である。このように本研究は、前半が私と宮地君、後半が私と近藤君による共同研究の如き形をとってはいるが、実際は博士課程の研究指導に参加した他の院生や外国からの研究員による討論の結果であることを付け加えておきたい。

尚テキストについては、既に上山氏がその著『敦煌仏教の研究』四二―四三頁に列記されているが、今回の校定本の作成に際し、以下の記号によって表記しているのものでそれを記しておく。

A本：S二六七四 大正蔵の原本。首部第一問中途まで欠、尾完。末尾に「丁卯年三月九日写畢。比丘法灯書」の識語あり。

B本：P二二八七 完本。首尾題なし。末尾に別筆の「丙申年二月 書記」の識語あり。

C本：P二六九〇 本校定の底本。首部より第十九問までの良筆本。

D本：S四二九七 首部より第五問まで。

E本：北 位二〇 首部（題なし）より第二問まで。

F本：P二八三五V 首部より第一問まで。尚上山氏は「第一問のみ」とする。

G本：M一一三九 第五問のみ。本校定では参照できず。

『大乘二十二問』の本文研究(一) (田中・宮地)

H本：S二七〇七V 第十五問のみ。

I本：S四一五九 第二十二問のみ。『四分律略撰頌』の次に連写。

上山本： 上山氏校訂本。

また、長文の答えがある場合は、適宜区切って【校異】【出典】【語註】を加えた。今回は「第六問」がこれに相当する。

(1) 結城令聞「曇曠の唯識思想と唐代の唯識諸派との関係——敦煌出土『大乘百法明門論開宗義記』に現はれたる——」『宗教研究』新八巻一号、一九三一年。「成唯識論を中心とする唐代諸家の阿頼耶識論」『東方学報』東京第一冊、一九三一年。

(2) 芳村修基「擬題」佛教初学入門書残巻考——敦煌におけるチベット佛教の進展——」西域文化研究会編『敦煌佛教資料』、一九五八年。「河西僧曇曠の傳歴」『印度學佛教學研究』七巻一号、一九五八年。

(3) 上山大峻「大蕃國大徳三蔵法師沙門法成の研究」(上)『東方学報』京都第三十八冊、一九六七年。(下)同第三十九冊、一九六八年。

二十二問^{*1}

夫至教幽深。下凡不測^{*2}。微言該遠。上智猶迷^{*3}。況曇曠識量荒塘^{*4}。學業膚淺。博聞既憊於經論。精解又迷於理事^{*5}。

臥病既久。所苦弥深。氣力轉微。莫能登涉。伏枕^{*6}辺外。馳恋聖顔。深問忽臨^{*7}。心神驚駭。將欲辭避。恐負力課。疾苦之中。恭答甚深之義。

二十二問

夫れ至教は幽深にして、下凡には測れず。微言は該遠にして、上智も猶お迷う。況や曇曠は、識量は荒塘にして、學業は膚淺なり。博聞なるも、既に經論に憊く、精解なるも、又た理事に迷う。

病に臥すること既に久しく、苦しむ所弥いよ深し。氣力轉た微にして、能く登涉すること莫し。枕を辺外に伏して、聖顔を馳恋す。深問の忽かに臨みて、心神驚駭す。將に辭避せんとするも、力課に負くを恐れ、疾苦の中、恭しく甚深の義に答う。

二十二問

最も勝れた教えは、まことに奥深く、下凡の者には到底測り知れないものであり、仏の妙なる言葉は遠大であって、智慧の優れた者でさえ、迷うほどであります。ましてや私、曇曠の知識などは、全く出鱈目であって、今まで積んできた學業なども、浅薄皮相なものにしか過ぎません。博くいろいろなことを聞いてきたつもりでも、まだ經論についてはよく分かつてはいないし、いろいろと詳しく理解はしてきたつもりでも、また理と事の関係については迷っています。

病床に臥してから、既に長くなり、その苦しみも益ます深くなっています。氣力は段だんに萎えてきて、皇帝の所に登城することもできなくなってしまうました。病の床を辺境の地に置いて、皇帝の顔に想いを馳せています。皇帝から内容の深い質問が、俄に私の

敢申狂簡。窃効微誠。然其問端。至極幽隱。或有往年曾學。或有昔歲不聞。所解者。以知見而積之。未曉者。以通理而暢之。所懼不契聖情。乖於本旨。特乞哀恕。遠察衷勤。

敢えて狂簡を申ぶるも、窃かに微誠を効さん。然るに其の問端は、至極幽隱なり。或いは往年に曾て学ぶこと有り、或いは昔歳に聞かざること有り。解する所は、知見を以て之を積し、未だ曉らかならざるは、通理を以て之を暢ぶ。懼るる所は聖情に契わず、本旨に乖くことなり。特に乞うらくは、哀恕もて遠く衷勤を察せんことを。

ところに下されて、私の心の中は驚きの念でいっぱいです。質問に答えることを辞退しようと思いましたが、けれども、皇帝から賜った務めに背くことを恐れ、病の苦しみの中で、皇帝から問われたはなはだ深い教義について恭しく答えることと致します。

敢えて私は気持ちばかり大きくぞんざいな行いを重ねても、密かに忠誠の念をつくしていこうと思えます。しかし、皇帝の質問は極めて奥深く神秘的なものです。そこには私、曇曠がかつて学んだ事もあれば、また一方、昔は聞かなかつたことも含まれています。私が理解できるところは、私の知見によつて解釈していくし、まだ理解できないでいるところは、世間一般に広まっている教説によつてこれを明らかに致します。私が恐れているのは、皇帝の心にならず、教えの本来の意味に乖くことあります。私が特にお願い

したいのは、あなた皇帝の寛大なる思いやりの念でもって、はるかに私の真心を察していただきたいということです。

【校異】

※この段は、B、C、D、E、F本の五本の内、C本を底本とする。ただし、B、D本は破損箇所があるため、該当箇所の対校は不能とした。

- ※1 底本は「二十二問」に作るも、B、D、E、F本はこれを欠く。
- ※2 底本、B、E、F本は「惻」に作るも、上山本により「測」に改む。
- ※3 E本は「智」を「知」に作る。
- ※4 E本は「曇」を欠く。
- ※5 E本は「於」を欠く。
- ※6 E本は「枕」を欠く。
- ※7 F本は「疾」の上に「虚」を加える。
- ※8 F本は「微」を欠く。
- ※9 F本は「曾」の下に「問」を加える。
- ※10 F本は「或有」を欠く。
- ※11 F本は「不」を欠く。
- ※12 E、F本は「情」を「精」に作る。
- ※13 F本は「偶心乗」に作る。
- ※14 E本は「忠」に作る。

【第一問】第一問云。菩薩離世俗之地。不向声聞緣覺之行。欲令一切衆生除煩惱苦。作何法者。

謹対。謂諸凡夫。有人我執（註1）。由執我故。起煩惱業。沈溺三界（註2）。輪轉四生（註3）。受苦無窮。莫能自出。即此三界。可治可壞（註4）。故名為世。隱覆真理。顯現妄法。又名為俗。地者。即是依持之義（註4）。既依人執。世俗事成。故人我執。名世俗地。

第一に問うて云く、「菩薩は世俗の地を離れ、声聞・縁覺の行にも向わず。一切の衆生をして煩惱の苦を除かしめんと欲せば、何なる法を作すや。」

謹みて対う、「諸もろの凡夫とは、人我の執有り。我に執するに由るが故に、煩惱の業を起こし、三界に沈溺し、四生に輪轉し、苦を受くること窮り無く、能く自ら出づること莫きを謂う。即ち此の三界とは、治むべく壞すべし。故に名づけて世と為す。真理を隱覆し、妄法を顯現するは、又た名づけて俗と為す。地とは、即ち是れ依持の義なり。既に人に執するに依りて、世俗の事成ず。故に人我の執を、世俗地と名づく。」

第一に問う、「菩薩とは、世俗の境地を離れたものであり、声聞や縁覺の行いをしようとはしない。菩薩があらゆる衆生に煩惱の苦を除かせようとするならば、どのような方法を用いるのか。」

謹んでお答えします、「諸もろの凡夫とは、人我への執著があり、我に執著することによって煩惱による行いを起こし、三界に沈み溺れてしまい、四生をめぐり、苦を受けることに終わりがなく、自らその迷いの世界から抜け出すことができないの言います。つまり、この三界とは、自ら治めるべきものであり、壞すべきものであります。だから名付けて世とします。真理を隠してしまい、誤った法を顯すので、また名付けて俗とします。地とは、依持のことです。人我への執著によって世俗の事が成立するのです。だから人我への執著を世俗の地と名付けるの

若二乘人。修我空觀。了人我空。不起凡夫諸漏煩惱。不發世間生死漏業。雖離凡夫世俗之地。由有法執。見有五蘊(註5)生滅之法*6。執有世間三界之苦。深厭生死。樂求涅槃*7。不樂住世。救拔群品。故是聲聞緣覺之行*8。

若初發心修行菩薩。自信己身有真如法。知心妄動。無前境界。修無相法。離一切相。都無所得(註6)。了人法空。了人空故。不著三界。能離凡夫世俗之地。了法空故。不樂涅槃。不向聲聞緣覺之行。了人法空。能離凡夫二乘之行。名

二乘の人の若きは、我空の觀を修し、人我の空なるを了り、凡夫の諸漏・煩惱を起さず、世間の生死の漏業を發さず。凡夫・世俗の地を離ると雖も、法執有るに由りて、五蘊生滅の法有るを見、世間・三界の苦有りと執す。深く生死を厭い、涅槃を樂い求め、世に住りて、群品を救拔するを樂わず。故に是れ聲聞・緣覺の行なり。

初發心の修行の菩薩の若きは、自らの己身に真如の法有るを信じ、心の妄動にして、前には境界無きを知る。無相の法を修し、一切の相を離れ、都て無所得にして、人と法の空なるを了る。人の空なるを了るが故に、三界に著さ

です。

もし二乘の人であるならば、我が空であるという觀方を修め、人我が空であることを悟り、凡夫の諸もろの煩惱を起さず、世間の生死に執らわれた煩惱の行いをすることはありません。凡夫の住む世俗の地から離れているとはいつても、法に対する執著がありますので、五蘊の生滅する法があると見、世間や三界の苦があると執著しているのです。深く生死の苦を厭い、涅槃の樂を求め、俗世に住って、多くの人達を救済しようとはしないのです。これを聲聞や緣覺の行というのです。

初發心の段階にいて修行している菩薩であるならば、自らの体の中に真如の法があることを信じており、心が妄想によって動くのであり、前には世俗の境界が存在しないということを知覚しているのです。(菩薩は)無相の法を

菩薩行。

ず。能く凡夫・世俗の地を離る。法の空なるを了るが故に、涅槃を楽わず。声聞・縁覚の行にも向わず。人と法の空なるを了り、能く凡夫・二乗の行を離るるを、菩薩の行と名づく。

修しており、それ故に一切の姿かたちを離れ、すべて無所得であって、人も法も空であることを悟っているのです。つまり人が空であることを悟っているので、三界にあつて執著することはなく、凡夫や世俗の人びとの境地を離れているのです。また法が空であることを悟っているので、涅槃をむやみに希うこともなく、声聞や縁覚のひとりよがりな行をしようともしないのです。人も法も空であることを悟り、凡夫や二乗の行を離れているのを、菩薩の行と名付けるのです。

故維摩經云。非凡夫行。非賢聖行。是菩薩行。此菩薩行。契順真如。離一切相。一切分別故。離凡夫世俗之地。不向声聞縁覚之行。能為衆生説如是法。令離一切煩惱之苦。故修無念。離一切相。即是此中所作法也。

故に『維摩經』に云く、へ凡夫の行にも非ず、賢聖の行にも非ず、是れ菩薩の行なりと。此の菩薩の行は、真如に契順す。一切の相、一切の分別を離るるが故に、凡夫・世俗の地を離れ、声聞・縁覚の行にも向わず。能く衆生の為に是の如き法を説きて、一切の煩惱の苦より離れしむ。故に無念を修し、

だから『維摩經』には次のように言われています、へ凡夫の行でもないし、優れた聖者の行でもない、これこそが菩薩の行である」と。この菩薩の行こそが真実に契っているのです。全ての姿かたち、全ての思慮分別を離れているからこそ、(菩薩は) 凡夫や世俗の人びとの境地を離れ、声聞や縁覚の行

一切の相を離るるは、即ち是れ此の中に作す所の法なり。」

をしようとすることもないので。衆生のために今まで述べてきたような法おしえを説いて、あらゆる煩惱の苦しみから離れさせることができるのです。だから無念を修して、あらゆる姿かたちから離れるのが、この中でなすべきことなのです。」

【校異】

※この段は、B、C、D、E、Fの五本及び中途よりA本が加わり、C本を底本とする。ただし、D本は破損箇所があるため、該当箇所の対校は不能とした。

- ※1 F本は「聞」を欠く。
- ※2 F本は「生」を「先」に作る。
- ※3 F本は「壊」を「懷」に作る。
- ※4 B本は「依」を「於」に作る。
- ※5 A本は「依人執」より始まる。
- ※6 A本は「之法」の二字を欠く。
- ※7 F本は「涅槃」までで擱筆す。
- ※8 A本は「故是」を「是故」に作る。
- ※9 底本は「非」を欠くも、A、B、D、E本により補う。
- ※10 E本は「行」を欠く。
- ※11 底本は「灯」に作るも、A、B、D、E本により「惱」に改む。

※12 A本は「是此」を「此是」に作る。

【出典】

〔典1〕 『維摩詰所説經』卷中・文殊師利問疾品第五

文殊師利。彼有疾菩薩。如是觀諸法。又復觀身無常苦空非我。是名為慧。雖身有疾常在生死。饒益一切而不厭倦。是名方便。又復觀身不離病病不離身。是病是身非新非故。是名為慧。設身有疾而不永滅。是名方便。文殊師利。有疾菩薩。如是調伏其心不住其中。亦復不住不調伏心。所以者何。若住不調伏心是愚人法。若住調伏心是聲聞法。是故菩薩不當住於調伏不調伏心。離此二法是菩薩行。在於生死不為汚行。住於涅槃不永滅度。是菩薩行。非凡夫行非賢聖行。是菩薩行。（大正藏卷一四・五四五頁中）

【語註】

〈註1〉 人我……個人存在としての我。われわれの身体のうちに実在すると妄想される実体我。

〈註2〉 三界……欲界・色界・無色界のこと。

〈註3〉 四生……胎生・卵生・湿生・化生のこと。

〈註4〉 依持……よりどころ。

〈註5〉 五蘊……色・受・想・行・識のこと。

〈註6〉 無所得……何ものにもとらわれぬ自由の境地。

【第二問】 第二問云。^{※1} 又不退入行菩薩。^{※2} 内所思意。外身顕現。法中内修第一行法。何是外行。第一法是何。

第二に問うて云く、「又た不退入行の

菩薩は、内に思意する所、外に身に顕

現す。法中にて、内に第一の行法を修

す。何れか是れ外の行なるや、第一の

第二に問う、「また不退位に入つて修

行する菩薩は、自らの心内で思うこと

を、外の身の上に顕わすことができる。

様々な行法の中で、心内にて第一の

法とは是れ何ん。」

謹対。所問深遠。文意難知。須述兩解。以通妙趣。

第一釈云。夫云不退。総有三種。一信不退。即十住初。自信己身有真如法性無動念。是本源心。由有此性。決定成仏。深信解故。分証真如。決定不退。大乘正信。心亦不退轉。趣入二乘。亦能權現。化作仏身。八相成道。利衆生事。由得定信。成此功能。故此菩薩。名信不退。

謹みて対う、「問う所は深遠にして、文意は知り難し。須く両解を述べ、以て妙趣に通ずべし。」

第一に釈して云く、へ夫れ不退と云うは、総じて三種有り。一に信不退とは、即ち十住の初めに於て、自ら己身に真如・法性有りて念を動ずること無きを信ず。是れ本源の心にして、此の性を有するに由りて決定して成仏す。深く信解するが故に、真如を分証して、決定して不退なり。大乘を正信せば、心も亦た不退轉なり。二乘に趣入し、亦た能く權に現われ、化して仏身と作り、八相に成道するは、衆生を利する事なり。定信を得るに由りて、此の機能を成ず。故に此の菩薩を信不退と名づく。

行法を修するのである。ならば、何が外の身の行なのか、そして第一の行法とは一体何なのか。」

謹んでお答えします、「あなたが質問している内容は、とても奥深いものであって、文章の意味するところは、なかなか理解することができません。そこで私なりの二つの解釈を述べ、それで質問の趣旨に通ずるようにしたいと思います。」

第一の解釈を述べましょう、へ不退については、全部で三種類のものがあります。一番目の信不退とは、十住の最初の位に於て、自分の身に真如・法性があり、念の動くことが無いのを信じていることです。これは最も根源の心であり、この法性を持つていることによつて、必ず成仏できるのです。これを深く信じているから、真如をはっきり悟つて、必ず不退の境地に到るのです。大乘を正しく信じるならば、その人の

二証不退。即初地位。断分別障。正証真如。一念能至百仏世界。供養百仏。請^{*6}轉法輪。開^{*7}導群生。拔濟含識。由証真如。離分別故。不起一切煩惱過失。永不退失真無漏^{*8(註3)}心。故此菩薩。名証不退。

二に証不退とは、即ち初地の位にて、分別の障を断じ、正に真如を証す。一念もて能く百仏の世界に至り、百仏を供養す。法輪を転ずるを請^こわば、群生を開導し、含識を拔^{ばつさい}濟す。真如を証するに由りて、分別を離るるが故に、一切の煩惱の過失を起こさずして、永く真の無漏の心を退失せず。故に此の菩薩を証不退と名づく。

心の中も不退転なものとなります。そのような人達は二乗の者達の所へ赴き、仮に姿を現わし、自分の身を仏身に換え、仏の生涯の八つの姿を示して成道するのが、衆生を利益することなのです。確かな信を得ることによって、このような仏の機能を成就するので、だからこの菩薩を信不退と名付けるのです。

二番目の証不退とは、十地の初地の位にあつて、分別による障害を断ち切り、正しく真如を悟ることです。わずか一念を起こせば、百仏のいる世界に至り、そこで百仏を供養することができます。法輪を転ずることを請^こえば、多くの衆生を教え導き、衆生を救済することができます。真如を悟ることによって、分別を離れるのであるから、全ての煩惱による過失を起こすことなく、永遠に真実の無漏の心を失うことがありません。だからこの菩薩を証不

三行不退。即入八地。註。常任運住。註。純無相心。在法駛流。任運而轉。刹那刹那。万行倍增。外雖起化。不動無相。內雖無動。外化無窮。由不退動。無相行故。此位菩薩。名行不退。

今此文。言不退者。即此三位不退人也。言入行者。行謂行位。即入此三不退位也。此諸菩薩。內心所有思惟意樂。為化衆生。外起作用。是故名為外身顯現。即彼所修無相妙行。名為內修第一行法。

三に行不退とは、即ち八地に入り、常に任運に住し、純ら無相の心たり。法の駛流に在りて、任運にして轉じ、刹那刹那に万行倍增す。外に化の起ると雖も、不動にして無相なり。内に無動なりと雖も、外の化は無窮なり。退動せず、無相の行なるに由るが故に、此の位の菩薩を行不退と名づく。

今、此の文中、不退と言うは、即ち此の三位の不退の人なり。入行と言うは、行は行位を謂い、即ち此の三の不退の位に入ることなり。此の諸もろの菩薩の、内心に所有する思惟・意樂は、衆生を化せんが為に、外に作用を起すな

退と名付けるのです。

三番目の行不退とは、十地の内の八地に入り、いつもあるがままの世界に任せ、純粹に無相の心なのです。あらゆるものが速い流れで移り変わる中であつて、その流れに任せてみずからを轉じ、一瞬一瞬においてあらゆる行の功德が倍增するのです。外には変化が起きて、内心は動することなく無相なのです。内心が動じないといつても、外の変化は窮まることがないのです。後戻りすることのない無相の行であるからして、この位にある菩薩を行不退と名付けるのです。

今、この手紙に出てくる不退というのは、これらの三つの不退の位にいる人のことです。入行というのは、行は修行の階位のことであり、すなわちこれらの三つの不退の位に入ることと言えます。諸もろの菩薩が内心に抱いて

第二釈云。言不退者。即不動也。若心無念^{〔註6〕}。名為不動也^{*16}。若至無念不動行中。名為不退入行菩薩。内心所有思惟意樂。行住坐臥^{*17}。常現在前。所修行中。是故名為外身顯現。而其内修無相妙行。常不動念。名為内修第一行法。

り。是の故に名づけて外に身に顕現すと為す。即ち彼の修する所の無相の妙行を、名づけて内に第一の行法を修すと為す」と。

第二に釈して云く、へ不退と言うは、即ち不動なり。若し心の無念ならば、名づけて不動と為すなり。若し無念の不動の行中に至らば、名づけて不退入行の菩薩と為すなり。内心に所有する思惟・意樂は、行住坐臥、常に前に在りて、修する所の行中に現わる。是の故に名づけて外に身に顕現すと為すなり。而して其の内に無相の妙行を修し、常に念を動かさざるを、名づけて内に第一の行法を修すと為すなり」と。

いる考えや意^{おも}いは、衆生を教化するために、外に向かつて作用を起こすのです。だから、これらを名付けて外に身に顕現すとするのは、すなわち彼らが修める無相の妙行のことを、名付けて内に第一の行法を修すとするのです」と。

第二の解釈を述べましょう、へ不退というのは、すなわち不動ということです。もし心が無念であるならば、名付けて不動とすることです。もし無念である不動の行を行ずるに至るならば、名付けて不退入行の菩薩とすることです。(諸もろの菩薩が)内心に抱いている考えや意いは、行住坐臥の一挙手一投足の上にも存在していて、修行しているその行の中に現われるのです。だから名付けて外に身に顕現すとすることです。逆に心の内に無相の妙行を修め、いつも念を動かすことがないのを、名付けて内に第一の行法を修すとすることです。

【校異】

※この段はA、B、C、D、E本の五本の内、C本を底本とする。ただし、E本は中途までで以下を欠く。またA、B、D本は破損箇所があるため、該当箇所の対校は不能とした。

- ※1 B、D本は「云」を欠く。
- ※2 E本は「又」を欠く。
- ※3 D、E本は、「文」を「聞」に作る。
- ※4 底本は「原」に作るも、A、B、D、E本により「源」に改む。
- ※5 底本、B、E本は「心」を欠くも、A、D本により補う。
- ※6 E本は「論」に作る。
- ※7 D、E本は「道」に作る。
- ※8 底本は「真如」に作るも、A、B、D、E本により「真」に改む。
- ※9 E本は「入」を欠く。
- ※10 A本は「軍」に作る。
- ※11 A、D本は「性」に作る。
- ※12 A本は「軍」に作る。
- ※13 E本は「位」に作る。
- ※14 D本は「位」を欠く。E本は「行謂行」までで以下を欠く。
- ※15 A、D本は「法行」に作る。
- ※16 底本、B、D本は「也」を欠くも、A本により補う。
- ※17 B本は「往」に作る。

【語註】

〈註1〉不退……不退位のこと。再び退くことのない悟りの境地。

〈註2〉十住……菩薩の修行すべき五十二の段階のうち、第十一位から第二十位までをさす。心を真実の空理に安住するところ。

〈註3〉無漏……煩惱の無くなった境地。

〈註4〉八地……菩薩の修行すべき五十二の段階のうち、第四十一から五十二位までを十地という。すなわち、歡喜地・離垢地・

発光地・焰慧地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の十段階。ここではその八番目の境地をいう。

〈註5〉無相……差別の相を離れていること。

〈註6〉無念……念おもいにとらわれのないこと。

【第三問】第三問云。修身口意。從初至修行。行如何。

第三に問うて云く、「身口意を修するには、初めより至るに修行するには、行ずること如何。」

第三に問う、「身口意の三業を修めるのに、最初から終わりまで修行するには、一体どのように行じたらいいか。」

謹対。修身口意。須戒定恵。

言修戒者。復有三種。一攝律儀戒。

離身口意所有十惡。^{註1}二攝善法戒。即身

口意所修行十善。^{註2}三攝衆生戒。即行十

善。利益衆生。修行如此三聚淨戒。即

是初修身口意也。

謹んで対う、「身口意を修するには、

戒定恵を須もとう。

戒を修すると言うは、復た三種有り。

一には攝律儀戒、身口意の有する所の

十惡を離ることなり。二には攝善法

戒、即ち身口意の修する所の十善を行

ずることなり。三には攝衆生戒、即ち

十善を行じ、衆生を利益することなり。

謹んでお答えします、「身口意を修めるには、戒定恵を用いるのです。

戒を修めるといふのは、また三種類

あります。一には攝律儀戒で、身口意

に有る所の十惡を離れることです。二

には攝善法戒で、身口意の修めるべき

十善を行うことです。三には攝衆生戒

で、十善を行い衆生を利益すること

此の如くの三聚淨戒を修行すること、即ち是れ初めに身口意を修することなり。

言修定者。身定。謂即結跏趺坐。不低不昂不傍不側。故經偈云。見尽跏趺像。魔王尚驚怖。何況入道人。端坐不傾動。

口定。謂即言成准的。語行相応。心口皆順。如説能行。如行能説。楷定正邪。令物帰信。

定を修すると言うは、身の定とは、即ち結跏趺坐を謂う。低からず、昂からず、傍だたず、側かざるなり。故に「経偈」に云く、へ跏趺の像を見尽くさば、魔王尚お驚怖す。何に況んや入道の人の、端坐して傾動せざるをやと。

す。このように三聚淨戒を修行することこそ、最初の段階で身口意を修めることなのです。

定を修めると言うのは、(以下の通りであります。)先ず身の定とは、結跏趺坐を言うのです。それは、姿勢が低くもなく、昂くもなく、寄りかかることもなく、傾いたりもしないことです。だから「経偈」に言います、へ結跏趺坐をした像を見てしまったならば、魔王でさえも恐れおののいてしまう。まして入道の人が端坐して、身体を傾けず動かさなければ、尚更ではないかと。

口の定とは、即ち言の成るが准的なるを謂う。語と行と相応せば、心も口も皆な順ず。説くが如くに能く行じ、行ずるが如くに能く説かば、正邪を楷定し、物をして帰信せしむるなり。

口の定とは、言葉にしたことの実現することが標準であることを言います。言葉と行いが一致するならば、心も口も皆な順應するのです。言葉通りによく行い、行いの通りによく説くことができるならば、正と邪をはつきりさせ、人びとを帰信させるのです。

心定。謂即遠離散乱。常在有相無相三昧。恒不遠離心一境性。有相定者。即經所說。觀^{〔註4〕}三昧。觀^{〔註5〕}淨土等。無相定者。即經所說。離一切相。一切分別。

身口意業。能如是定。即是次修三業地也。

^{〔註6〕}言修慧者。身惠有二。有相無相。二種別故。身謂眼耳鼻舌身也。身者聚義。聚此五種。總名為身。此五雖無計度隨念。而亦得有微細分別。能趣^{〔註6〕}色声香味觸境。而生恋著。於此五塵。有二種慧。若能了知。是非好惡。不迷不謬。名為世間。有分別慧。若於此五。無所分別。

心の定とは、即ち散乱より遠離するを謂う。常に有相・無相の三昧に在りて、恒に心の一境性を遠離せざるなり。有相の定とは、即ち「經」に説く所の觀仏三昧・觀淨土等なり。無相の定とは、即ち「經」に説く所の一切の相・一切の分別を離ることなり。

身口意の業の、能く是の如く定ずれば、即ち是れ次の三業を修するの地なり。

慧を修すると言うは、身の恵に二有り。有相と無相の二種の別なるが故なり。身とは眼・耳・鼻・舌・身を謂うなり。身とは聚の義なり。此の五種を聚めて、總じて名づけて身と為す。此の五は計度し隨念すること無しと雖も、亦た微細の分別有るを得。能く色・

心の定とは、心の乱れから離れることを言います。いつも有相と無相の三昧の中にあつて、恒に心が一つの対象に集中することから離れることがないので。有相の定とは、「經」に説かれている觀仏三昧や觀淨土等を指しています。無相の定とは、「經」に説かれてゐるすべての相やすべての分別を離れることです。

身口意の業がよくこのように定まつてゐるならば、次の段階の三業を修める境地となるのです。

慧を修するというのは、身の恵に二つのものがあります。有相と無相の二種に分かれるからです。身とは眼耳鼻舌身のことを言うのです。(また)身とは聚すなわち集まりという意味です。この五種を集めて、總稱して身と名付けます。この五種は過去に思いをめぐ

雖了了知^{*7}。而不貪著。是即名為無分別^{*8}。即修身業所有慧也。

声・香・味・触の境に趣きて、恋著を生ず。此の五塵に於て、二種の慧有り。若し能く是非・好悪を了知せば、迷わず、謬^{あやま}らず。名づけて世間の有分別慧と為す。若し此の五に於て、分別する所無くば、了了として知ると雖も、貪著せず。是れ即ち名づけて無分別慧と為す。即ち身業の所有せる慧を修するなり。

口業恵者。亦有二種。有相無相。二種別故。弁説善惡。令衆生如是。名有相口業慧也。雖能記別。徳失差別。而於其中。不著語相。雖終日語。而無所語。雖常説法。而無所説。是即名為無分別語。是名依慧所修語也。

口業の恵とは、亦た二種有り。有相と無相の二種の別なるが故なり。善惡を弁説し、衆生をして是の如くならしむるを、有相口業慧と名づく。能く徳失・差別を記別すと雖も、其の中に於て、語相に著せず。終日語ると雖も、

らしたり、あれこれ思い計ることはな
いといつても、わずかばかりの分別が
残ってしまうのです。(だから)色声香
味触の境に対して、執著を生じてしま
うのです。この五つの煩惱の対象に於
て、二種の慧があります。もしよく是
非や好悪を理解するならば、迷うこと
もなく謬することもありません。これを
世間の有分別の慧と名付けるのです。
もしこの五つの煩惱の対象に於いて、
分別するところがないならば、はつき
り知るといつても、そこに貪著するこ
とがないのです。これを無分別の慧と
名付けるのです。つまり、これが身業
による慧を修めることなのです。

口業の恵についてもまた二つのもの
があります。有相と無相の二種に分か
れるからです。善惡について説き示し
て、人びとをその言葉通りにさせるこ
とを有相の口業の慧と名付けるのです。
得失や差別を弁別するといつても、そ

語る所無く、常に説法すと雖も、説く所無し。是れ即ち名づけて無分別の語と為す。是れを慧に依りて修する所の語と名づく。

言意慧者。亦有二種。有相無相。二種別故。若意了知。一切諸法。善惡得失。因果差別。捨惡從善。名有相慧。能於此中。都無所得。於一切法。無所取捨。心念不生。名無相慧。

若身口意。依如是慧。而修行者。是究竟修身口意也。

意の慧と言うは、亦た二種有り。有相と無相の二種の別なるが故なり。若し意の一切の諸法の善惡・得失・因果・差別を了知し、惡を捨て善に従わば、有相の慧と名づく。能く此の中に於て、都て得る所無く、一切の法に於て、取捨する所無く、心念生ぜざるを無相の慧と名づく。

若し身口意は、是の如き慧に依りて修行せば、是れ究竟して身口意を修するなり。」

の中に於て言葉の表層にとらわれることがなく、終日語るといっても、そこに言葉のあとをとどめず、いつも説法するといつても、説法のあとかたをとどめないことです。これを無分別の語と名付けるのです。これを慧によって修めるところの語と名付けるのです。

意の慧についてもまた二つのものがあります。有相と無相の二種に分かれるからです。もし意があらゆるものの善惡・得失・因果・差別を理解し、惡を捨てて善に従えば、それを有相の慧と名付けます。この中にあつて全く得るところもなく、あらゆるものに於て取捨するところもなく、心念が生じないのを無相の慧と名付けるのです。

もし人の身口意は、今まで述べたような慧によって修行するならば、究極的な意味での身口意を修めることになるのです。」

【校異】

※この段はA、B、C、D本の四本の内、C本を底本とする。またA、B、D本は破損箇所があるため、該当箇所の対校は不能とした。

- ※1 D本は「終」に作る。
- ※2 底本、B、D本は「修」を欠くも、A本にて補う。
- ※3 A、B、D本は「結跏趺像」に作る。
- ※4 D本は「上」に作る。
- ※5 上山本は「恐」に作る。
- ※6 B本は「取」、A、D本は「聚」に作る。
- ※7 上山本は「声聞」に作る。
- ※8 底本、B、D本は「則」に作るも、A本により「即」に改む。
- ※9 A本は「命」に作る。
- ※10 B、D本は「則」に作る。
- ※11 B本は「徳」に作る。

【出典】

〔典1〕 『大法炬陀羅尼經』卷第五・忍校量品第十か。

如是念時。即便獲得大勝三昧三昧力故足歩虚空詣菩提樹。至樹下已。結加端坐身不動搖。梵天。菩薩如是結加坐時。有一魔王名拘知舍。住菩薩前以偈讚曰。

丈夫速成仏 為世安樂故

無憂甘露句 滅尽諸煩惱 (大正藏卷二一・六八三頁上)

【語註】

〈註1〉十悪……殺生・偷盜（盗み）・邪淫・妄語（偽り）・綺語（ざれごと）・悪口・両舌（二枚舌）・貪欲・瞋恚・愚癡の十の悪業をいう。このうち初めの三つは身の悪、中の四つは口の悪、後の三つは意の悪をそれぞれ指す。

〈註2〉十善……前の十悪を行わない、不殺生から不邪見までをいう。

〈註3〉准的……准は準の俗字。準的はめあて、標準のこと。

〈註4〉觀仏三昧……仏の相好・功德を思い浮かべ、一心に念ずる三昧。

〈註5〉觀浄土……仏菩薩の住む清浄なる世界を思い浮かべること。

〈註6〉言修慧者。身恵有二。……「慧を修する」と言うは、身の恵に二有り」の如く、慧と恵が混同されており、校定では原文のままとした。以下同じ。

【第四問】第四問云。又今処於五濁悪世。

自既無縛。彼亦無解。義者如何。

第四に問うて云く、「又た今、五濁の悪世に処るに、自らは既に縛無くも、彼らも亦た解無し。義は如何。」

第四に問う、「また今は五濁にまみれた悪世に身を置いてはいるが、自分は既に束縛が無いのに、人びとはなお束縛から解かれていない。そのわけはどうなのだ。」

謹対。濁者滓穢。不清浄義。衆生所以処濁劫者。由自身命。不清浄故。衆生及命。皆渾濁者。由煩惱濁。有煩惱者。由其見濁。妄見塵沙。遍処生執。不清浄故。名之為濁。

謹みて対う、「濁とは滓穢、清浄ならざるの義なり。衆生の濁劫に処る所以は、自らの身命の清浄ならざるに由るが故なり。衆生及び命の皆な渾濁なるは、煩惱の濁に由るなり。煩惱の有るものは、其の見濁に由りて妄りに塵沙

謹んでお答えします、「濁とは滓穢と云うことであり、清浄ではないということ。人びとがけがれに満ちた末世にいるというのは、自分自身の肉身と命が清浄ではないからです。人びとやその命が全て濁っているのは、煩惱

と見、遍処に執を生じ、清浄ならざるが故に、之を名づけて濁と為す。

のけがれに由るからです。煩惱のある人は、邪見によつて妄りに物を塵や砂と見てしまい、あらゆる所に執とらわれを生じ、清浄でないからして、これを濁と名付けるのです。

衆生本性。即是真如。常樂我淨。^{*3}具恒沙德。自背本源。^{*4}妄生諸見。起煩惱業。受苦無窮。真樂本有。失而不知。妄苦本空。得而不覺。如是一切。皆從見生。見濁不生。諸濁皆淨。^{*5}若離妄念。照達心源。淨相尚無。^{*6}濁相寧有。離淨濁相。不見身心。無罣無礙。誰縛誰解。了無解縛。乃能離縛。但自無縛。彼亦能解。如斯妙義。著在群經。伏願披尋。^{*7}昭然自見。

衆生の本性は、即ち是れ真如にして常樂我浄なり。恒沙の徳を具そなうるも、自ら本源に背き、妄りに諸もろの見を生じ、煩惱の業を起こし、苦を受くること窮り無し。眞の樂は本有なるも、失いて知らず。妄苦は本空なるも、得て覺らず。是の如く一切は、皆な見從より生ず。見濁生ぜざれば、諸もろの濁も皆な浄なり。若し妄念を離るれば、心源に照達し、浄相も尚お無し。濁相寧いずんぞ有らん。浄濁の相を離れ、身心を見ざれば、罣無く礙無し。誰か縛し誰か解かん。解縛無しと了さとれば、乃ち能く縛を離る。但だ自ら縛無くんば、彼も亦た能く解かん。斯の如き妙義、群經あら著わさる。伏して願わくは披尋

人びとの本性は、眞実そのものであつて、常・樂・我・浄の特性を具えています。数限りない徳をそなえているのに、(衆生は)自ら本源に背いて、諸もろの妄見を生じ、煩惱による業を起こし、苦を受け続けて止むことがないのです。本当の樂とは元もとそなわっているのに、それをなくしてしまつて(そのことに)気が付かないのです。妄念による苦というのは、元もと空であるのに、それを身に受けても、そのことが分からないのです。このようなすべての状況は、(自らの)見から生じるのです。見濁が生じないならば、他の濁も皆な浄らかなままです。もし妄念を離れるならば、心の本源に照し出さ

せんことを。昭然として自おのずから見あらわれ
ん。」

れ、淨相さえなくなります。まして濁相などありえましようか（ありえません）。淨とか濁とかの相を離れ、身とか心とかの相を見ないならば、心に何も障害が無くなります。一体誰が束縛し誰が解き放つ必要がありえましようか（ありえません）。解くとか束縛するとかが無いと悟ったならば、束縛から離れることができるのです。ただ自分に束縛するものが無いならば、他人もまた解き放つことができるのです。このようなすばらしい教えは、多くの経典に既に著されておりす。どうか心よりお願いしているのは、（あなたさまが）この教えを探し出すことができますことを。（なぜならばこの教えは、経典から）はつきりと自然に現われ出るはずですから。」

【校異】

※この段はA、B、C、D本の四本の内、C本を底本とする。

※1 A本は「説」に作る。

※2 A、B、D本、上山本は「義如何者」に作る。

※3 D本は「浄」を欠く。

※4 D本は「皆」に作る。

※5 A、B、D本は「静」に作る。

※6 D本は「上」に作る。

※7 底本とA本は「照」に作るも、B、D本により「昭」に改む。

【語註】

〔註1〕五濁……劫濁（時代による環境及び社会のけがれ）、見濁（悪い思想が世間にはびこること）、煩惱濁（煩惱や悪徳が世間にはびこること）、衆生濁（衆生の身心が共に衰えて、苦しみが多くなること）、命濁（衆生の寿命が短くなること）の五つを指す。なお、この五つは最初から盛んなわけではなく、漸次盛んになるといわれており、それを五濁増という。

【第五問】第五問云。仏有有余無余涅槃。^{〔註1〕}此二涅槃。為別実有。為復仮説。

第五に問うて云く、「仏に有余・無余の涅槃有り。此の二の涅槃、為た別して実有となるや、為復た仮説なるや。」

第五に問う、「仏の世界には有余と無余の涅槃がある。この二つの涅槃を分けて実有とするか、それとも仮説とするのか。」

謹対。言涅槃者。是円寂義。円謂円満。具衆徳故。寂謂寂静。異苦障故。涅槃不同。諸教異説。就要而言。不過四種。

謹みて対う、「涅槃と言うは、是れ円寂の義なり。円とは円満を謂う。衆徳を具するが故なり。寂とは寂静を謂う。苦障と異なるが故なり。涅槃の不同なるは諸教に説を異にす。要に就いて言

謹んでお答えします、「涅槃というのは、円寂ということでありませう。円とは円満のことです。諸もろの徳を具えているからです。寂とは寂静ということとです。苦の障りとは異なっているか

わば、四種に過ぎず。

らです。涅槃に違いがあるのは、諸もの教えの中でそれぞれ異なった説があるからです。その要点について言えば、四種に過ぎません。

一者。自性清淨涅槃。謂一切法。本真如理。雖有客染^{註2}。而本性淨。具無辺徳。湛若虚空。一切有情。平等共有。其性本寂。故名涅槃。

一には自性清淨涅槃なり。一切法は本より真如の理なるを謂う。客染有りとも、本より性淨なり。無辺の徳を具え、湛きこと虚空の若し。一切の有情、平等に共有し、其の性本より寂なり。故に涅槃と名づく。

一には自性清淨涅槃であります。あらゆるものは本来真如の理であることを言うのです。外から来た煩惱が有るといつても、本来仏性は清淨なのです。(その仏性は、)限らない徳を具え、その深いことは、虚空のようであります。すべての生きとし生けるものは、すべて平等に具えており、その仏性は本来寂靜なのです。だから涅槃と名付けるのです。

二有余依涅槃。謂即真如。出煩惱障。此有二種。若二乘人。至無學位。依此生^{註5}。苦身之上。斷煩惱障。顯真如性。心徳寂靜。名為涅槃。而此苦身。尚未棄捨。苦未寂靜。名為有余依^{註6}。言余依者。即苦身也。若仏世尊。煩惱雖尽。

二には有余依涅槃なり。真如に即きて煩惱の障を出るを謂う。此れに二種有り。若し二乗の人、無學位に至らば、此の生死に依りて、苦の身の上に煩惱の障を断じ、真如の性を顯わす。心の徳、寂靜なるを名づけて涅槃と為す。

二には有余依涅槃であります。真如によって煩惱の障りから出ることを言うのです。これには二種が有ります。もし声聞・縁覚の二乗の人が無學位即ち阿羅漢果に至るならば、この生死の世界において苦を背負った身のままに煩

身心寂靜。名為涅槃。有余無漏。常樂我淨。功德身在。依此身上。所得涅槃。是故名為有余依涅槃。

而して此の苦の身、尚お未だ棄捨せず、苦未だ寂靜ならざるを名づけて有余依と為す。余依と言うは、即ち苦の身なり。仏・世尊の若きは、煩惱より雖^{離カ}尽し、身心寂靜なり。名づけて涅槃と為す。有余の無漏は常・樂・我・淨の功德、身に在り。此の身の上に依りて、得る所の涅槃なり。是の故に名づけて有余依涅槃と為す。

悩の障^{さわ}りを断ち、真如の本性を顕わすのです。心にある徳が寂靜であるのを涅槃と呼ぶのです。しかし、この苦を背負った身は、なおまだ苦を捨てきつたわけではなく、苦が未だ寂靜に至っていないのを名付けて有余依と呼ぶのです。余依というのは、苦を背負った身のことなのです。仏・世尊の場合には、煩惱から離れ、滅し尽くし、身心共に寂靜なのです。これを涅槃と呼ぶのです。まだこの世に生存していなから煩惱から脱しきつた状態というのは、常・樂・我・淨の功德が、この身にあるのです。このような身に於て、得られるところの涅槃です。だから名付けて有余依涅槃と呼ぶのです。

三無余依涅槃。謂即真如。出生死苦。此有二種。若二乘人。至無學位。一切煩惱。先已断尽。今復更厭此苦依身。以滅^{計₃}尽定。滅其心智。又自化火。焚分^{計₄}段身。無苦依身。諸苦永寂。是故名曰。

三には無余依涅槃なり。真如に即きて生死の苦を出るを謂う。此れに二種有り。若し二乗の人、無學位に至らば、一切の煩惱は先に已に断じ尽くすも、今、復た更に此の苦の身に依るを厭う

三には無余依涅槃であります。真如によつて生死の苦しみの世界から出ることを言うのです。これには二種があります。もし声聞・縁覚の二乗の人が無學位に至るならば、全ての煩惱は先

無余依涅槃。若仏世尊。無漏功德。所
依身上。一切煩惱。生死苦惱。悉已寂
靜。永無苦惱。余所依故。是故名曰。
無余依涅槃。

四無住処涅槃。謂即真如。出所知障。
大悲大智。常所輔翼。由斯不住。生死
涅槃。利樂有情。窮未來際。用而常寂。
故曰涅槃。若諸菩薩。至第五地。能斷
下乘般涅槃障。能証真如。無住真理。
名為分得。無住涅槃。若仏世尊。一切
障尽。摩訶般若。解脫法身。三事円満。

て、滅尽定を以て其の心智を滅す。又
た自ら火と化し、分段身を焚かば、苦
の身に依ること無く、諸もろの苦永く
寂す。是の故に名づけて無余依涅槃と
曰う。仏・世尊の若きは、無漏の功德
もて身の上に依る所の一切の煩惱も、
生死の苦惱も悉く已に寂靜たり。永く
苦惱の余さえ無き依り所なるが故に、
是の故に名づけて無余依涅槃と曰う。

四には無住処涅槃なり。真如に即き
て所知障を出るを謂う。大悲・大智も
て常に輔翼する所なり。斯に由りて生
死・涅槃に住らず、有情を利樂するこ
と、未來際を窮むるまで用きて常に寂
たり。故に涅槃と曰う。若し諸もろの
菩薩、第五地に至らば、能く下乗の般

に已に断じ尽くしてはいても、今また
更にこの苦が身にまとわり付くのを厭
うて、滅尽定によってその心智を滅す
のです。また自らの身を火となし、
分段身を焼いたならば、生死の苦が身
にまとわり付くこともなくなり、諸も
ろの苦は永遠になくなります。だから
これを無余依涅槃と呼ぶのです。仏・
世尊の場合には、煩惱を滅し尽くした
無漏の功德によって、身の上にまとわ
り付く全ての煩惱も、生死の苦惱も悉
く寂靜となるのです。永遠に苦惱のな
ごりをとどめない身であるから、これ
を無余依涅槃と呼ぶのです。

四には無住処涅槃であります。真如
によつて正しく知ることを妨げる障り
から出ることを言うのです。大悲と大
智によつて、いつも人びとを助け守る
ことなのです。この大悲と大智によつ
て生死にも涅槃にも住まらず、諸もろ
の有情を利益するのに、遙か未來際に

名大涅槃。

涅槃の障を断じ、能く真如を証するも、真理に住まること無し。名づけて分得の無住涅槃と為す。仏・世尊の若きは、一切の障尽き、摩訶般若・解脱・法身の三事、円満す。大涅槃と名づく。

至るまで、大悲と大智が用きながら、しかも常に寂靜なのです。だから涅槃と言うのです。もし諸もろの菩薩が第五地に至れば、それより下の段階の涅槃に入ることの障りを断ち、真如を悟っても、真理に留まることがないので、これを分得の無住涅槃と呼ぶのです。仏・世尊の場合は、全ての障りが尽きて、摩訶般若と解脱と法身の三事が円満するのです。これを大涅槃と名付けるのです。

四涅槃中。一切衆生。皆有初一。二乗無学。容有前三。唯我世尊。可言具四。既四涅槃。皆依真立。就其出障。立四不同。扱其真如体。無差別故。仏身上有余無余。但幻義存。実無有二。

四の涅槃の中、一切の衆生、皆な初の一を有す。二乗の無学、前の三を容有す。唯だ我が世尊のみ、四を具すと言うべし。既に四の涅槃、皆な真に依りて立つも、其の障より出るに就ては、四の不同を立つ。其の真如の体に扱らば、差別無きが故に、仏身上の有余・無余、但だ幻の義として存す。実には二有ること無し。」

四つの涅槃の内、全ての衆生はみな最初の一つを具えています。声聞と縁覚の二乗の阿羅漢は、前の三つを具えています。唯だ我が世尊だけが四つを具えていると言うことができます。既に四つの涅槃は全て真如によって成り立っているけれども、その障りから抜け出ることについては、四つの違いがあります。真如の本質からすれば、差別はないわけですから、仏身に現われ

る有余と無余とは、単なる幻というこ
とに過ぎないのです。真実には二つ有
ることはないのです。」

【校異】

- ※この段は、A、B、C、D本の四本の内、C本を底本とする。ただし、D本は中途までで以下を欠く。
- ※1 A本は「此二涅槃」を欠く。
- ※2 底本、A、D本は「得」に作るも、B本により「徳」に改む。
- ※3 A、B、D、上山本は「浄」に作る。
- ※4 底本は「衆生」に作るも、A、B、D本により「法」に改む。
- ※5 A本は「依」を欠く。
- ※6 底本、B本は「為」を欠くも、A本により補う。
- ※7 D本は「身心」までで以下断欠する。
- ※8 底本、B本は「得」に作るも、A本により「為」に改む。
- ※9 底本、A本は「以」に作るも、B本により「已」に改む。
- ※10 底本は「知」に作るも、A、B、上山本により「智」に改む。
- ※11 ※9と同じ。
- ※12 A本は「就其出障。立四不同扱」の内、「出障。立四」を欠く。

【語註】

〈註1〉有余無余涅槃……有余涅槃は生存の根源を残している不完全な涅槃、無余涅槃は完全な真実の涅槃。

〈註2〉客染……客塵と同じ。本来あるものではなく、外から偶発的に付いただけ。

〈註3〉滅尽定……心のはたらきがすべて無くなってしまった三昧。阿羅漢がこの三昧に入って無心となり、安樂の境地を体感する。

〈註4〉分段身……身体的なさまざまな面で、際限を有している身のこと。

【第六問】第六問云。仏有三身。其法身者。周遍法界。化身各々在一切仏。而其応身。有一有異。

謹対。然其仏身。諸教異説。或開或合。義理多門。今者先明。仏身之相。次則顯其開合之門。然後答其所問之義。統論諸教。有五仏身。

第六に問うて云く、「仏に三身有り。其の法身は法界に周遍す。化身は各おの一切の仏に在り。而して其の応身は一有りや異有りや。」

謹みて対う、「然して其の仏身は、諸もろの教に説を異にす。或いは開き、或いは合し、義理は多門なり。今は先ず仏身の相を明らかにし、次には則ち其の開合の門を顕わし、然る後に其の問う所の義に答えん。諸もろの教を統て論ぜば、五仏身有り。」

第六に問う、「仏には三つの身がある。その法身は法界に遍く行き渡っている。化身はそれぞれあらゆる仏に存在している。ところで、その応身は一つなのか、それとも違いがあるのか。」

謹んでお答えします、「しかして仏身については、諸もろの教によって様々な説があります。広げて数を多くしたり、合わせて数を少なくしたり、その意味内容は多岐に渡っています。今は先ず仏身の特徴を明らかにし、次には則ち広げたり合わせたりしたその内容を明らかにし、その後、問われている事柄にお答えしたいと思います。諸もろの教えをまとめて言えば、五つの仏身が有ります。」

第一身者。是諸如来。真淨法界。具無數量。真常^{*3}功德。無生無滅。湛若虛空。一切如来。平等共有。此有二名。一名法身。是報化身。諸功德法。所依止故。二名自性身。真如^{*4}乃是諸法自性。是報化身。実自性故。

第二身者。是諸如来。三無^{註1}数劫。所集無^{註2}辺。真実無漏。自利功德。感得如是。淨妙^{*5}色身。諸根相好。一一無^{註3}辺。相續湛然。尽未來際。此有三名。一名法身。諸功德法。所集成故。二名報身。以果酬因。受樂報故。三名自受用。唯自受用。妙法樂故。

第一身とは、是れ諸もろの如来の、真淨の法界にて具せる無數量の真常の功德なり。生無く滅無くして、湛きこと虚空の若し。一切の如来は平等に共有す。此れに二の名有り。一は法身と名づく。是れ報・化身の、諸もろの功德の法の依止する所の故なり。二は自性身と名づく。真如は乃ち是の諸法の自性にして、是れ報・化身の実の自性なるが故なり。

第二身とは、是れ諸もろの如来の、三無^{註1}数劫に集むる所の、無^{註2}辺の真実・無漏なる自利の功德なり。感得せば是の如し。淨妙^{*5}の色身、諸根の相好の、一一無^{註3}辺にして、相續すること湛然にして、未來際を^{つく}尽す。此れに三の名有り。一は法身と名づく。諸もろの功德

第一身とは、諸もろの如来が、真実にして清淨なる法界に於て具えてゐる、無数の真実にして常なる功德であります。それは生ずることも滅することも無く、その広いことは虚空のようであります。すべての如来はこの功德を平等に具えているのです。この身には二つの名前があります。一つは法身と言います。これは、報身と化身が、諸もろの功德の法の拠り所としているものだからです。二つには自性身と言います。真如とは、あらゆるものの本質のことであり、これ（真如）は報身と化身の真実の本質であるからです。

第二身とは、諸もろの如来が、三無^{註1}数劫にわたる長い間に集めてきた、際限のない真実にして無漏である自己をを利益する功德であります。それを感得すると以下のようにあります。清らかで妙なる色身と、諸もろの器官の姿形が、一つ一つ際限なく、相續してい

の法の集成する所の故なり。二は報身と名づく。果を以て因に酬い、樂報を受くるが故なり。三は自受用と名づく。唯だ自らのみ妙法樂を受用するが故なり。

第三身者。謂諸如来。三無数劫。所集無辺。利他功德。随住十地。菩薩所宣。所顯漸勝。相好之身。此有五名。一名他受用。令他受用。妙法樂故。二名報身。酬報菩薩。見仏因故。三名応身。応諸菩薩。浄心現故。四名化身。前後改転。如變化故。五名法身。諸功德法。所莊嚴故。

第三身とは、諸もろの如来の、三無数劫に集むる所の、無辺の利他の功德を謂う。十地に住まるに随いて、菩薩の宣る所、顯わす所の漸に勝れたる相好の身なり。此れに五の名有り。一は他受用と名づく。他をして妙なる法樂を受用せしむるが故なり。二は報身と名づく。菩薩の見仏の因に酬報いるが故なり。三は応身と名づく。諸もろの菩薩の浄心に応じて現わるるが故なり。四は化身と名づく。前後に改転し、変

く様は湛たんとしたものであり、未来永劫にまでわたるものであります。この身には三つの名前があります。一つは法身と言います。それは諸もろの功德の法が集まって成就したものであるからです。二つは報身と言います。それは果でもって因に報い、安樂の報いを受けるからです。三つは自受用と言います。それは唯だ自分だけが妙なる法樂を受けるからです。

第三身とは、諸もろの如来が、三無数劫にわたる長い間に集めてきた、際限のない他を利益する功德のことを言います。十地の段階に住まるに随って、菩薩が宣べ、顯わすところの次第に勝れていく姿形を持った身なのです。この身には五つの名前があります。一つは他受用と言います。他の人びとに妙なる法樂を受けさせるからです。二つは報身と言います。菩薩が仏を見ようとする因に報いるからです。三つは応

第四身者。是諸如来。大慈悲故。為未登地。諸菩薩衆。二乘凡夫。所現微少。麤功徳身。此有三名。一名化身。以非真身。如化現故。二名応身。但応凡小。心所現故。三名法身。亦功徳法。所聚集故。

第五身者。是諸如来。為化六道。外道等類。諸衆生故。所現種種異類身相。

化するが如き故なり。五は法身と名づく。諸もろの功徳の法もて、莊嚴せらるが故なり。

第四身とは、是れ諸もろの如来の、大慈悲の故に、未だ地に登らざる諸もろの菩薩衆・二乗・凡夫の為に、現わす所の微少にして麤なる功徳身なり。此れに三の名有り。一は化身と名づく。真身に非ず、化現の如きを以ての故なり。二は応身と名づく。但だ凡小の心の現わるる所に應ずるが故なり。三は法身と名づく。亦た功徳の法の聚集する所の故なり。

第五身とは、是れ諸もろの如来の、六道・外道等の類、諸もろの衆生を化

身と言います。諸もろの菩薩の清らかな心に應じて現われるからです。四つは化身と言います。(菩薩が)前後に身を転じ、変化して現われるからです。五つは法身と言います。諸もろの功徳の法によつて、莊嚴されるからです。

第四身とは、諸もろの如来が、大慈悲心によつて、未だ初地にも登ることのできない諸もろの菩薩衆や二乗や凡夫のために、現わしたほんのわずかで粗末な功徳の姿です。この身には三つの名前があります。一つは化身と言います。真実の身ではなく、様ざまに変化して現われるようなものだからです。二つは応身と言います。ただ凡夫や小人の心が現われるのに応じるからです。三つは法身と言います。功徳の法が集まった所だからです。

第五身とは、諸もろの如来が、六道や外道などの類や諸もろの衆生を教化

此有二名。一名化身。但是暫時變化現故。二名応身。暫応六道。衆生現故。非法身者^{*12}。非功德法集成相故。

明仏身已^{*13}。顕開合者。或有聖教。開為五身。依広義門。具分別故^{*14}。或有聖教。開為四身。即五身中。前之四身。不説第五。第四摂故。暫時化現。非久住故。或有聖教。合為三身。謂法報化。此有三義。或合五中。前之二身。名為法身。其第一身。是真如理。其第二身。是真如智^{*15}。理智無別。合為一故。金光明経説。法如如及如如智。名法身故^{〔典1〕}。其報身者。即是五中。第三仏身。報諸菩薩功德因故。其化身者。即五身中。第四化身。謂化地前凡小現故^{*17}。

する為の故に、現わす所の種種の異類の身相なり。此れに二の名有り。一は化身と名づく。但だ是れ暫時に變化し現わるるが故なり。二は応身と名づく。暫く六道・衆生の現わるるに應ずるが故なり。法身に非ざるは、功德の法集成せる相に非ざるが故なり。

仏身を明らかにし已る^{おわ}。開合を顕わすとは、或いは聖教に、開きて五身と為す有り。広義の門に依りて、具さに分別するが故なり。或いは聖教に、開きて四身と為す有り。即ち五身の中の前の四身のみにして、第五を説かず、第四に摂むる^{おさ}が故なり。暫時に化現して、久しく住まるに非ざるが故なり。或いは聖教に、合して三身と為す有り。法と報と化を謂う。此れに三義有り。或いは五の中の、前之二身を合して、名づけて法身と為す。其の第一身は是れ

するためということ、現わす様ざまな異類の姿のことです。この身には二つの名前があります。一つは化身と言います。これは少しの間だけ(身を)變化させて現われるからです。二つは応身と言います。しばらく六道や衆生が現われるのに應ずるからです。法身でないのは、功德の法が集まった姿ではないからです。

仏身について明らかにしおわりました。(次に、仏身の)開合を明らかにするというのは、或いは尊い教えに、(仏身を)開いて五身とするとあります。それは広い立場から詳しく分別したからです。或いはまた、尊い教えに、(仏身を)開いて四身とするとあります。つまり五身の内の最初の四身だけにして、第五身を説かず、それを第四身に収めるからです。(第五身が)少しの間だけ現われて、久しくは留まらないからです。或いはまた尊い教えに、(仏身

真如の理なり、其の第二身は是れ真如の智なり。理と智に別無く、合して一と為るが故なり。『金光明経』に「法の如及び如如智を法身と名づく」と説くが故なり。其の報身とは、即ち五の中の第三の仏身なり。諸もろの菩薩の功德の因に報ゆるが故なり。其の化身とは、即ち五身の中の第四の化身なり。地前の凡小を化せんとして現わるるを謂うが故なり。

を)合せて三身とするとあります。法身と報身と化身を言うのです。これに三つの意味があります。或いはまた五身の内の最初の二身を合せて、法身と言います。その第一身は真如の理であり、その第二身は真如の智であります。この理と智には区別がなく、合わせれば一となるからです。『金光明経』には、「法の如如と如如智を法身と名づく」と説かれているからです。その報身とは、すなわち五身の中の第三番目の仏身のことです。諸もろの菩薩が積んだ功德の因に報いるからです。その化身とは、すなわち五身の中の第四番目の化身のことです。初地に登る前の凡夫や小人を教化するために、その身を現わすことを言うからです。

【校異】

※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。

※1 A本は「其」を欠く。

※2 底本は「之」に作るも、A、B本により「諸」に改む。

- ※3 A本は「其」に作る。
- ※4 A本は「諸法身自性」に作る。
- ※5 A本は「浄」を欠く。
- ※6 A本は「所顯謂」に作る。
- ※7 底本は「令他受用」を欠き、A本は「命他受用」に作るも、B本により「令他受用」に改む。
- ※8 A本は「好」に作る。
- ※9 底本は「妙」に作るも、A、B本により「少」に改む。
- ※10 A本は「功德身故」に作る。
- ※11 A本は「集聚」に作る。
- ※12 A本は「身」を欠く。
- ※13 ※12と同じ。
- ※14 A本は「是」に作る。
- ※15 底本、B本は「実」に作るも、A本により「如」に改む。
- ※16 A本は「如如及」を欠く。
- ※17 A本は「化」を欠く。

【出典】

〔典1〕 十卷本『金光明經』卷第二・分別三身品第三

善男子。云何菩薩摩訶薩。了知法身。為除諸煩惱等障。為具諸善法故。唯有如如如如智。是名法身。前二種身。是假名有。此第三身。是真実有。為前二身而作根本。何以故。離法如如。離無分別智。一切諸仏無有別法。一切諸仏智慧具足。一切煩惱究竟滅尽。得清浄仏地。是故法如如如智。攝一切仏法。(大正藏卷一六・四〇八頁中下)

八卷本『金光明經』卷第一・三身分別品第三

善男子。云何菩薩摩訶薩了別法身。為欲滅除一切諸煩惱等障。為欲具足一切諸善法故。惟有如如如智。是名法身。前二種身是假名有。是第三身名為真有。為前二身而作本故。何以故。離法如如。離無分別智。一切諸仏無有別法。何以故。一切諸仏智慧具足故。一切煩惱究竟滅盡故。得清淨仏地故。是故法如如如智。攝一切仏法故。(大正藏卷一六・三六二頁上)

四卷本『金光明經』には該當個所無し。

【語註】

〈註1〉三無數劫……三阿僧祇劫と同意。菩薩が仏となる目的を達するまでに經過する、無限に長い時間を三分したものの。菩薩の五十の修行の階位のうち、十信・十住・十行・十回向の四十位を第一阿僧祇劫、十地のうち初地から七地までを第二阿僧祇劫、八地から十地までを第三阿僧祇劫とする。

〈註2〉無漏……「第二問」〈註3〉参照。

〈註3〉異類……人間以外の生存領域のもの。

第二義者。或初法身。即前五中。第一仏身。是諸功德法之体故。言報身者。合前五中。第二第三。有經論中。皆名受用。為自為他。受樂報故。化身即是。五中第四。義如前説。此依大乘經論説也。

第二義とは、或いは初の法身は、即ち前の五中の第一仏身なり。是れ諸もの功德の法の体なるが故なり。報身と言うは、前の五中の第二と第三を合するものなり。「經論」中に皆な受用と名づくること有り。為た自とし、為た他とするは、樂報を受くるが故なり。化身は即ち是れ五中の第四なり。義は前に説くが如し。此れは大乘の「經論」に依る説なり。

二番目の意味では、最初の法身は、前に述べた五つの仏身の中の第一の仏身のことです。これは諸もの功德の法の根本であるからです。報身というのは、前に述べた五つの仏身の中の第二と第三を合わせたものです。「經論」の中では、みなこの報身を受用と名付けているのです。自としたり他とするのは、樂報を受けるからです。化身はすなわち前に述べた五つの仏身の中の

(第三義者。)^{〔註1〕}小乗経論。^{〔註2〕}説法報化三身之義。與此不同。

言法身者。即是如来。無漏戒蘊。定蘊。慧蘊。解脱蘊。解脱智見蘊。^{〔註2〕}此五是其功德之法。是諸賢聖。所依体故名爲法身。

言報身者。即是王宮。父母所生。三十二相八十種好。酬報過去因之果故。^{〔註4〕}

言化身者。即是如来所現。神通化相

第三義とは、小乗の「経論」にて、法・報・化の三身の義を説くるは、此れと同じからず。

法身と言うは、即ち是れ如来の無漏の戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、解脱智見蘊なり。此の五は是れ其の功德の法なり。是れ諸^{もろ}の賢聖の所依の体なるが故に、名づけて法身と爲す。

報身と言うは、即ち是れ王宮にて、父母の生ぜし所の三十二相八十種好のものなり。過去の因に酬報^{むく}いる果なるが故なり。

化身と言うは、即ち是れ如来の現わ

第四であります。意味は前に述べた通りです。これは大乘の「経論」によつた説です。

三番目の意味では、小乗の「経論」で、法・報・化の三身の意味について説くことは、これ(大乘)とは異なっています。

法身とは、如来の無漏の戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、解脱智見蘊のことです。この五つはその功德の法であります。これは諸^{もろ}の賢人や聖者達が拠り所とする体であるからして、法身と言います。

報身とは、王宮に於て、父母から生まれ出た三十二相八十種好を持った身であります。過去の因に報いた結果であるからです。

化身とは、如来が現わすところの神

身^{*5}。是此有二種。一者共有^{*6}。即同二乘。所有化現^{*7}。十八變等。二不共有。即如經說。如來所現。大神變身。

或有聖教。合為二身。一者法身。即合五中。前之二身。二者化身。即合五中。後之三身。義如前說。

或有聖教。合為一身。即是五中。前之四身。皆功德法。總名為法。自体依止^{*8}。聚集義故。總名為身。顯開合竟。

す所の神通の化相身なり。是此^レに二種有り。一は共有^{ぐゆう}、即ち二乘に同じくして、所有^{あらゆる}ものの化現せる十八變等なり。二は不共有、即ち「經」に説くが如く、如來の現わす所の大神變身なり。

或いは聖教に、合して二身と為す^レと有り。一は法身、即ち五中の前の二身を合す。二は化身、即ち五中の後の三身を合す。義は前に説くが如し。

或いは聖教に、合して一身と為す^レと有り。即ち是れ五中の前の四身なり。皆な功德の法にして、總じて名づけて法と為す。自らの体が依止し、聚集せる義なるが故に、總じて名づけて身と為す。開合を顯わし竟る。

通力による化相身のことであります。これには二種類あります。一つは共有^{ぐゆう}で、声聞と縁覚の二乗と同じように、所有^{あらゆる}ものの変現するところの十八變等のことです。二つは不共有で、「經」に説くように、如來だけが現わすところの大神變身のことです。

或いは聖教の中に、合して二つの身にする^レというものがああります。一つは法身で、すなわち五つの中の前の二身を合わせたものです。二つは化身で、すなわち五つの中の後の三身を合わせたものです。意味は前に述べた通りです。

或いは聖教の中に、合して一つの身にする^レというものがああります。五つの中の前の四身を合わせたものです。それはすべて功德の法であって、まとめて法と言います。自らの体が拠り所とし、聚集する意味であるからして、ま

答所問者。所言法身。周遍法界。此依五中。前二身説。真如妙理。及能証^{註3}智。理智平等。皆遍周故。化身各各。在一切仏。即是五中。第四仏身。随彼彼仏。所現別故。応身為一。為異義者。此言¹¹応身。即当五中。第三仏身。此仏¹²応身。随¹³應十地。菩薩所現。初地菩薩。所現¹⁴仏身。坐於百葉蓮(華)花台上。一葉有一大千世界。其仏身量。称彼蓮花。二地所見。坐千葉蓮花。三地所見。坐万葉蓮花。乃至十地。如是¹⁷転増。初地見小。二地見大。同処同時。不相障礙。

問う所に答うれば、言う所のへ法身は法界に周遍すとは、此の五中の前の二身の説に依る。真如の妙理、及び能証の智は、理智平等にして、皆な遍周するが故なり。へ化身は各おの一切の仏に在りとは、即ち是れ五中の第四の仏身なり。彼彼の仏の現わるる所の別に随うが故なり。へ応身は為た一なるや、為た異なるやの義は、此の応身と言うは、即ち五中の第三の仏身に当る。此の仏の応身は、十地の菩薩の所現に随應するなり。初地の菩薩の所現の仏身は、百葉の蓮(華)花の台の上に坐す。一葉に一大千世界有り。其の仏身の量は、彼の蓮花に称う。二地の所見は、千葉の蓮華に坐す。三地の所見は、万葉の蓮花に坐す。乃至十地までは、の如く転増す。初地は小に見われ、二地は大に見わる。同処同時に相い障

とめて身と言います。これで開合の意味を明らかにし終ります。

あなたが質問するところにお答えするならば、あなたが言われるへ法身は法界に周遍すとは、五つの中の前半の二身の説によつています。真如の妙理と能証の智は、真理と智慧とが平等であつて、すべてが遍く行き渡つていくからです。へ化身はそれぞれ一切の仏にあるとは、五つの中の第四番目の仏身です。それは、それぞれの仏が現われる所の別に依つていくからです。へ応身は一つなのか、別なのかのことの意味は、(以下の通りです。)この応身というのは、五つの中の第三番目の仏身に当たります。この仏の応身は、十地の菩薩が現わす所に随つていくのです。初地の菩薩が現わす仏身は、百の葉を付けた蓮華の台座の上に坐つています。その一つの葉の中に、一つの大千世界があります。そこに住む仏

礙せず。

身の量は、蓮華の数にかなっていません。二地の菩薩が現わす仏身は、千の葉を付けた蓮華の台座の上に坐っています。三地の菩薩が現わす仏身は、万の葉を付けた蓮華の台座の上に坐っています。ないし、十地まで次第にその葉の数は増えていきます。初地は小さく現われ、二地は大きく現われます。同じ場所同じ時間に現われても、お互いに礙さまたげることはありません。

不可言一。不可言異。不可言一者。^{*18}

十地所見。各不同故。不可言異者。^{*19}所

見之仏。無別処故。菩薩所見。一異若

斯。諸仏応身。一異亦爾。一微塵中。^{*21}

有無量仏。一刹那中。含三世劫。一仏

住処。有一切仏。一切仏国。有一仏。^{*23}

一即一切。一切即一。同処同時。不相

障礙。以諸色法。無実体故。真如理智。

無限礙故。如衆翳者。同於一処。所見

差別。不相障礙。如衆灯光。各遍似一。^{*24}

由是義故。非但諸仏。所現応身。非一

一と言うべからず、異と言うべから

ず。一と言うべからずとは、十地の所

見、各おの不同なるが故なり。異と言

うべからずとは、所見の仏には、別処

無きが故なり。菩薩の所見の一異、斯

の若し。諸仏の応身の一異も、亦た爾

り。一微塵中に、無量の仏有り。一刹

那中に、三世劫を含む。一仏の住処に、

一切の仏有り。一切の仏国に、一仏有

り。一即一切、一切即一、同処同時に

相い障礙せず。諸もろの色法の実体無

これを同一と言ってはならないし、

異なっていると言ってもならないので

す。同一と言ってはならないというの

は、十地が現わすところのものが、そ

れぞれに違っているからです。異なっ

ていると言ってもならないというの

は、現われる仏が十地以外で現われる

ことがないからです。菩薩が現わすと

ころのものが、同一か異なるかについ

ては、今述べた通りです。諸もろの仏

の現わす応身が同一か異なるかも、ま

非異。乃至報身化身亦爾。

きを以ての故なり。真如の理智に限礙無きが故なり。衆翳の一处に同じくして、所見に差別あるも、相い障礙せざるが如し。衆灯の光の各おの遍ずるも、一に似たるが如し。是の義に由るが故に、但だ諸仏所現の応身、一に非ず異に非ざるのみに非ず、乃至報身・化身も亦た爾り。

た同じであります。ほんのわずかな塵の中にも、無量の仏がおります。ほんのわずかな時間の中にも、過去・現在・未来の三世にわたる時間を含んでいます。一仏が住んでいるところに、全ての仏がいるのです。全ての仏の国に、一仏がいるのです。一が一切であり、一切が一であり、同じ場所、同じ時間に、一と一切が並び立ち、お互いを礙さまたげることはありません。諸もろもろの存在には実体がないからであり、真実の理智には限りや礙さまたりがないから、このように言えるのです。多くの影が、一つの場所に有って現われ方に差別があるけれども、お互いを遮ることがないようなものです。多くの灯の光が、各おの行きわたっているけれども、一つのものに似ているようなものです。こういうわけだから、ただ諸もろの仏が現わすところの応身が、一でもなく異なるものでもないというだけではなく、更に報身や化身もまた同様でありま

【校異】

- ※この段は、A、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 B本は「即」を破損により欠く。
- ※2 B本は「依此」に作る。
- ※3 A本は「説」を欠く。
- ※4 A本は「之」を欠く。
- ※5 A本は「身」を欠く。
- ※6 A本は「有」を欠く。
- ※7 A本は「所現有化」に作る。
- ※8 B本は「心」に作る。
- ※9 A、B本は「理智」を欠く。
- ※10 A本は「周」を欠く。
- ※11 A本は「言」を欠く。
- ※12 A本は「於」を欠く。
- ※13 上山本は「蓮華花」に作る。
- ※14 A本は「一葉」を欠く。
- ※15 A本は「坐」を欠く。
- ※16 B本は「蓮」を欠く。
- ※17 底本は「而」に作るも、A、B本により「如」に改む。
- ※18 B本は「言」を欠く。

- ※ 19 A、B本は「言」を欠く。
- ※ 20 A本は「菩薩所見。一異若斯。諸仏応身。一異亦爾。一微塵中。有無量仏」を欠く。
- ※ 21 底本は「塵」を欠くも、B本により補う。
- ※ 22 A本は「仏」を欠く。
- ※ 23 A、B本は「一切仏」に作る。
- ※ 24 B本は「如衆」を破損により欠く。
- ※ 25 A本は「身」を欠く。

【語註】

〈註1〉(第三義者)……底本をはじめとするテキストには記されていないが、文章の構成上付加した。

〈註2〉戒蘊。定蘊。慧蘊。解脱蘊。解脱智見蘊……五分法身のこと。悟りに達した無学位の阿羅漢と仏が具えている身体のこと。

〈註3〉能証……真理を証るはたらきを具えていること。

【第七問】第七問云。仏有一切智。因從修行六波羅蜜。但本性清淨。湛然不動。是一切智。此二種如何。

第七に問うて云く、「仏に一切智有るは、六波羅蜜を修行するに因從^よるなり。但だし本性の清淨にして、湛然・不動なるも、是れ一切智なり。此の二種は如何。」

第七に問う、「仏にすべてを包摂する智慧が具わっているのは、六波羅蜜を修行するからである。一方、但だ本性が清淨であつて、落ち着き静かであるのも、すべてを包摂する智慧なのである。此の二種はどのように違うのか。」

謹對。仏一切智。有因緣具足。乃得

謹みて對う、「仏の一切智は、因緣具

謹んでお答えします、「仏のすべてを

成就。本性清淨。湛然不動。是一切智者。拋有因説也。因從修行六波羅蜜。成一切智者。就具緣説也。因緣具足。一切智成。隨闕一種。則不成就。此中隨闕因緣義者。雖有内因^{註一}。若不修行十波羅蜜。無由能成仏一切智。若雖修行十波羅蜜。而心取相。乖背本因^{註二}。亦不能成。仏一切智。

足する有りて、乃ち成就するを得。へ本性の清淨にして、湛然・不動なるも、是れ一切智なり。とは、因有るに拋るの説なり。へ六波羅蜜を修行するに因從りて、一切智を成ず。とは、縁を具するに就いての説なり。因と縁と具足せば、一切智、成ず。一種を闕くに随わば、則ち成就せず。此の中の因か縁かを闕く義に随わば、内因有りと雖も、若し十波羅蜜を修行せざれば、能く仏の一切智を成ずるに由無し。若し十波羅蜜を修行すと雖も、心、相を取りて、本因に乖背せば、亦た仏の一切智を成ずること能わず。

包摂する智慧とは、因と縁を具足することによって、成就することができるとです。あなたが言われるへ本性が清淨であつて、落ち着き静かであるのも、すべてを包摂する智慧なのである。とは、(因と縁の内の)因の有る時の説です。一方、へ六波羅蜜を修行するから、すべてを包摂する智慧を完成するとは、(因と縁の内の)縁を具足する時の説です。因と縁を具足したならば、すべてを包摂する智慧が完成するので、この内のどちらか一つを欠くならば、智慧が完成することはありません。この中の因か縁の一方を欠くということになれば、いくら内に因が有つたとしても、もし十波羅蜜を修行しなかつたならば、仏のすべてを包摂する智慧を完成する術はありません。もし十波羅蜜を修行したとしても、心が対象にとらわれて、本来の因に乖いてしまえば、また仏のすべてを包摂する智慧を完成することはできません。

故起信論云。如是報身。功德之相。因波羅蜜。無漏行薰。及由真如。不思議薰。内外二薰之所成就。一切智用。在於報身〔典1〕。報身尚然。智何不爾。

故に『起信論』に云く、へ是の如き報身の功德の相とは、波羅蜜に因る無漏行の薰、及び真如に由る不思議の薰なり。内外二薰の成就する所なり。一切智の用、報身に在りゝと。報身尚お然らば、智何ぞ爾らざらん。」

故に『起信論』には次のように言っています。へこのような報身の功德のありようとは、波羅蜜による無漏行の薰じたものであり、そして真如に由る不思議の薰じたものである。内と外の二つの薰習が成就する所なのである。すべてを包摂する智慧の働きは、報身にあるゝと。報身ですら、なおこのよう（に二つの働きがあるの）だから、仏の智慧がどうしてそうでないことがありえましようか。」

【校異】

- ※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 A本は「有因有縁有因縁具足」に作り、B本は「有因有縁因縁具足」に作る。
- ※2 A本は「行」を欠く。
- ※3 B本は「重」に作る。

【出典】

〔典1〕 真諦訳『大乘起信論』

此用有二種。云何為二。一者依分別事識。凡夫二乘心所見者。名為応身。以不知轉識現故見從外来。取色分齊不能尽知故。

二者依於業識。謂諸菩薩從初發意。乃至菩薩究竟地心所見者。名為報身。身有無量色。色有無量相。相有無量好。所住依果亦有無量種種莊嚴隨所現即無有不可窮盡離分齊相。隨其所應常能住持不毀不失。如是功德皆因諸波羅蜜等無漏行熏。及不思議熏之所成就。具足無量樂相故。說為報身。(大正藏卷三二・五七九頁中下)

実又難陀訳『大乘起信論』

此用有二。一依分別事識。謂凡夫二乘心所見者是名化身。此人不知轉識影現。見從外來取色分限。然仏化身無有限量。二依業識。謂諸菩薩從初發心乃至菩薩究竟地心所見者名受用身。身有無量色。色有無量相。相有無量好。所住依果亦具無量功德莊嚴。隨所應見無量無邊無際無斷。非於心外如是而見。此諸功德皆因波羅蜜等無漏行熏及不思議熏之所成就。具無邊喜樂功德相故亦名報身。(大正藏卷三二・五八七頁下五八八頁上)

【語註】

〈註1〉内因……結果を生ぜしめる内的な直接原因。
〈註2〉本因……本来具わった根本の原因。

【第八問】第八問云。衆生若行諸菩薩^{*1}行。發菩提心。如何發行。

謹對。夫欲修行諸菩薩行者。先須發起。大菩提心。然此發心。有其二種。一令初根。發有相心。二令九機^{*2}。發無相心。

第八に問うて云く、「衆生、若し諸もの菩薩行を行ずるに、菩提心を發さんには、如何に行を發すや。」

謹みて對う、「夫れ諸もの菩薩行を修行せんと欲る者は、先ず須く大菩提心を發起すべし。然るに此の發心に、其の二種有り。一は初根をして有相の

第八に問う、「衆生がもし諸もの菩薩行を行ずるのに、菩提心をおこそうとするには、どのように行をすればよいのだろうか。」

謹んでお答えします、「諸もの菩薩行を修めようとする者は、先ず最初に大菩提心を起こさねばなりません。ところで、この發心には二種類有ります。

心を発さしむ。二は九機をして無相の心を発さしむ。

一つは初心の者に有相の心を起こさせることです。二つは既に修行の段階にある者に無相の心を起こさせることです。

所言有相菩提心者。復有三種。一厭離有為心。為説世間。生死苦惱。令其厭離。不樂有為。永斷諸惡。為出離因。二欣樂菩提心。為説仏身。無量功德。究竟安樂。令其欣樂。修行諸善。為成仏因。三悲愍有情心。為説悲愍。一切衆生。自得無量。勝妙功德。令生廣大。救度之心。此三名為大菩提心。由有此心。能行万行。故經説此。名加行持。能持六度。加勝行故。

言う所の有相の菩提心には、復た三種有り。一に有為を厭離する心なり。世間の生死の苦惱を説きて、其れをして厭離し、有為を樂わらず、永く諸惡を断たしめ、出離の因となさしめんが為なり。二に菩提を欣樂する心なり。仏身の無量の功德にして、究竟の安樂なるを説きて、其れをして欣樂せしめ、諸善を修行せしめ、成仏の因となさしめんが為なり。三に有情を悲愍する心なり。一切衆生を悲愍するを説きて、自ら無量の勝妙功德を得、廣大にして救度の心を生ぜしめんが為なり。此の三を名づけて大菩提心と為す。此の心有るに由りて、能く万行を行す。故に「經」にて此れを説きて加行持と名づく。能く六度を持し、勝行を加うるが

ここに言う所の有相の菩提心には、また三種類有ります。一つには有為より離れようとする心です。俗世間の生死の苦しみを説いて、その苦しみから離れさせ、有為を願わず、永遠に諸悪の惡を断ち切らせ、苦しみから出離する原因となるようにするためです。二つには菩提を希う心であります。仏身に無量の功德や究竟の安樂があることを説いて、それらを求めさせ、諸もろの善業を修行させ、成仏の原因とさせようとするためです。三つには有情を憐れむ心です。あらゆる衆生を憐れむことを説いて、自ら無量の優れた功德を得て、廣大なる救済の心を生じさせようとするためです。この三つを名付けて大菩提心とするのです。この心

所言無相菩提心者。菩提名覺。即是真如。此性澄清。離一切相。^{*}但離妄念。覺道自成。何仮起心。外念求取。若発心念。外求菩提。此乃妄心。返成流浪。縦修万行。豈成菩提。今者但能一切不発。是名真実。発菩提心。

故なり。

言う所の無相の菩提心とは、菩提を覺と名づく、即ち是れ真如なり。此の性は澄清にして、一切の相を離る。但だ妄念を離るれば、覺道は自おのずから成ず。何ぞ心を起すを仮りて、外に求取せんと念おもうや。若し心念を發し、外に菩提を求むれば、此れ乃ち妄心にして、返りて流浪を成ぜん。縦い万行を修するも、豈に菩提を成ぜんや。今は但だ能く一切発さざるなり。是れを真実の發菩提心を名づく。

が有ることによつて、様ざまな行を行ずることができのです。だから「經」には、これを説いて「加行持」と言うのです。それは六度を行じ、勝れた行を加えていくからです。

あなたの言われる無相の菩提心とは、菩提を覺さとりと呼び、これこそが真如なのです。この菩提の本質は澄み清らかであり、すべての姿形を離れているのです。但だ妄念を離れさえすれば、覺りが自然に成就します。どうして心を起こして、外に覺りを求めようと思ふのでしょうか。もし心を發おこして、外に菩提を求めるならば、これが妄心であつて、逆に迷いの中を彷徨さまようことになるでしょう。たといあらゆる行を修めたとしても、どうして菩提を成ずることができのでしょうか。今はただすべて心を起こさないようにするだけです。これを真実の發菩提心と言うのです。

所言菩提。既即是覺。不被一切煩惱破壞。即是諸法。真実之心。所言發者。即是顯發。但能不起。一切妄情。菩提真心。自然顯發。是名真実。發菩提心。雖名發心。而無所發。由無所發。無所不發。乃是広發。大菩提心。非但名為發菩提心。亦名真行。菩薩妙行。如前三種。發菩提心。若無後說。真実發心。縱多劫修。終滯生死。如斯解積。深契仏心。亦順大乘。無相妙理。

言う所の菩提とは、既に即ち是れ覺なれば、一切の煩惱に破壊せられず。即ち是れ諸法の真実の心なり。言う所の發とは、即ち是れ顯發なり。但だ能く一切の妄情を起さざれば、菩提の真心、自然に顯發す。是れを真実の發菩提心と名づく。發心と名づくとも雖も、發す所無し。發す所無きに由りて、發さざる所も無し。乃ち是れ広く大菩提心を發すなり。但だ名づけて發菩提心と為すに非ず。亦た真に菩薩の妙行を行ずと名づく。前の如きの三種の發菩提心は、若し後に説ける真実の發心無くば、縦い多劫に修するも、終に生死に滯るなり。斯の如き解積は、深く仏心に契い、亦た大乘の無相の妙理に順うなり。

あなたの言われる菩提が、既に覺りであるから、すべての煩惱によって破壊されることはありません。つまり、これがあらゆる物の真実の心なのです。あなたの言われる發とは、顯發ということです。すべての妄情を起ささないならば、菩提の真心は自然に現われ出るので。これを真実の發菩提心と言うのです。發心と言うからといって、發すことがあるわけではありません。發すことがないからこそ、發さないこともないのです。すなわちこれがそれが広く大菩提心を發すことなのです。ただ単に發菩提心と言うのではありません。また真に菩薩の素晴らしい行いを行ずると言うのです。前に述べた三種の發菩提心は、もし後で説いた真実の發心がないならば、たとい長きにわたって修行したとしても、結局は生死の迷いの世界に滯ってしまうのです。このような解積は、深く仏心にか

なっていて、また大乘で説く無相の深い道理に順かなっているのです。」

【校異】

- ※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 A、B本は「諸」を欠く。
- ※2 底本は「久」に作るも、A、B本により「九」に改む。
- ※3 A本は「有」を欠く。
- ※4 底本は「三」を欠くも、A、B本により補う。
- ※5 A本は「有」を欠く。
- ※6 底本は「切」を欠くも、A、B本により補う。
- ※7 底本、B本は「貞」に作るも、A本により「真」に改む。
- ※8 A、B本は「真」に作る。
- ※9 A本は「名」を欠く。
- ※10 底本は「修行」に作るも、A、B本により「修」に改む。

【語註】

〔註1〕 加持持……加持のこと。仏・菩薩が不可思議な力をもって衆生を護ること。『大乘本生心地観経』卷八（大正蔵卷三・三二九頁下）等に見られる。

【第九問】 第九問云。十地菩薩。幾地有相。幾地無想。有想無想。何者是行。

第九に問うて云く、「十地の菩薩、幾いくばくの地か有相にして、幾いくばくの地か

第九に問う、「十地の菩薩は、何れの地が有相で、何れの地が無想なのか。

無想なるや。有想(相)と無想は、何れが是れ行なるや。」

謹対。夫想与相^{*3}。心境不同。想謂心想。相謂境相。心境互依。不可離別。今所問者。約心想言。經論所明。就境^{*4}相說。故攝大乘。唯識等論說。五地^{*5}前。有相觀多。無相觀少。至第六地。有相觀少。無相觀多^{*6}。七地能得。純無相觀。雖恒相統。猶有功用^{*7}。若至第八不動地^(註1)中。常任運住純無相觀。有相功用。永不現前^{*8}。

謹みて対う、「夫れ想と相は、心と境にして同じからず。想は心想を謂い、相は境相を謂う。心と境とは互いに依りて、離別すべからず。今、問う所は、心想に約して言い、「經論」の明かす所は、境相に就いて説く。故に『攝大乘』・『唯識』等の「論」に説けり、へ五地の前には、有相の觀多く、無相の觀少し。第六地に至りては、有相の觀少なく、無相の觀が多し。七地は能く純なる無相の觀を得。恒に相統すと雖も、猶お功用有り。若し第八の不動地の中に至れば、常に任運にして純なる無相の觀に住し、有相の功用は永(とこしなえ)に現前せず」と。

有相と無想とは、どちらが行なのか。」

謹んでお答えします、「想と相はそれぞれ心と対象としての境であって、同じではありません。想は心の中の想のことを言い、相は対象としての姿形のことを言います。心と対象としての境とは互いに関わり合っていて、離れることのできないものです。今、あなたが質問している所は、心の中の想に集約して言っているものであり、「經論」等が明らかにしているのは、対象としての姿形について説いたものなので。だから、『攝大乘論』や『成唯識論』等の「論」では、次のように説いています。すなわちへ第五地以前には有相の觀が多くて無相の觀が少ない。第六地に到ると、有相の觀が少なくなり、無相の觀が多くなる。第七地になると、純粹な無相の觀を得ることができ。それは常に相統しているといっても、

故此八地。初一念心。所生功德。過前兩大阿僧祇劫。所行万行功德善根。第二念後。倍々増勝。此以此故知。修無相行。百千万億恒河沙倍。勝有相行。然菩提道万行皆修。但於所修。心無所住。是則名為。無相勝行。不以無相。都無所修。祇以有相。心有礙故。不能遍修。一切諸行。是故無相。心無礙故。乃能遍修。一切妙行。

故に此の八地の、初めの一念の心が生ずる所の功德は、前の兩大阿僧祇劫に、行ずる所の万行の功德善根を過ぐ。第二念の後は、倍々に増勝す。此れを以て此の故に知る、無相の行を修すれば、百千万億恒河沙倍も、有相の行に勝ると。然して菩提道の万行を皆な修するなり。但だ修する所に於て、心に住する所無し。是れ則ち名づけて無相の勝行と為す。無相を以てするも、都て修する所無きにあらず。祇だ有相のみを以てせば、心に礙有るが故に、能く一切の諸行を遍修すること能わず。是の故に無相は心に礙無きが故に、乃ち能く一切の妙行を遍修す。

まだ（有相の觀による）功用が残っているのです。もし第八の不動地に到ると、常に自在にして純粹な無相の觀に住まり、有相の觀による功用は、永遠に現われることがない」と。

したがって、この八地の、最初の一念の心が生み出す功德は、それ以前の兩大阿僧祇劫にも渡って行われてきた万行の功德善根を超えているのです。第二念以降は、ますますその功德が増加していくのです。今まで述べてきたことによつてわかることは、無相の行を修すれば、（功德の面に於て）百千万億恒河沙倍も、有相の行より勝るということです。だから菩提道としての万行をすべて修するのです。但だ修する所において、心に住する所が無いのです。これを名付けて無相の勝行と云うのです。無相をもつてするのだけれども、すべて修する所が無いというのではありません。ただ有相のみをもつて

故経論説。八地已上。心無礙故。一切行中。起一切行〔典²〕。法駛流中。任運而轉。刹那刹那。功德増進。如是皆由得無相行。是故無相※¹⁴。是真實行。

故に「経論」に説く、（八地已上は心に礙無きが故に、一切の行中に一切の行を起す）と。法は駛流しりゅうの中に、任運にして転じ、刹那刹那に功德は増進す。是の如きは、皆な無相の行を得るに由る。是の故に無相は是れ真實の行なり。」

すれば、心に礙さまたげるものがあるからして、あらゆる行を遍あまねく修することができないのです。このようなわけで無相は心に礙げるものがないからして、あらゆる妙行を遍く修することができるとは、

だから「経論」で説いているのは、（第八地以上は心に礙げるものがないからして、あらゆる行の中ですべての行を行うことができる）と。法は時の速い流れの中で、自在に転変し、その一瞬一瞬に功德が増進するのです。これはすべて無相の行を得ることによるのです。だからこそ無相は真實の行なのです。」

【校異】

- ※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 底本、B本は「想」に作るも、A本により「相」に改む。但しB本は「想」の上の「地有」を欠く。
- ※2 A本は「地」を欠く。
- ※3 底本は「想」に作るも、A、B本により「相」に改む。

- ※ 4 A本は「相境」に作る。
- ※ 5 A本は「地」を欠く。
- ※ 6 A本は「觀」を欠く。
- ※ 7 A本は「由」に作る。
- ※ 8 A、B本は「行」に作る。
- ※ 9 底本は「須」に作るも、A、B本により「後」に改む。
- ※ 10 底本は「此」を欠くも、A、B本により補う。
- ※ 11 A本は「此故」を欠く。
- ※ 12 A本は「菩薩」、B本は「菩薩道」に作る。
- ※ 13 A本は「即」に作る。
- ※ 14 A本は「無」を欠く。

【出典】

〔典1〕 仏陀扇多訳『攝大乘論』卷下

何故第七地名為遠行。有功用行尽至故。何故第八地名為不動。一切相不動故。何故第九地名為善慧。得上弁才智故。(大正藏卷三一・一〇七頁上)

真諦訳『攝大乘論』卷下

云何七地名遠行。由至有功用行最後辺故。云何八地名不動。由一切相及作意功用不能動故。云何九地名善慧。由最勝無礙弁智依止故。(大正藏卷三一・一二六頁上)

玄奘訳『攝大乘論』卷下

何故七地説名遠行。至功用行最後辺故。何故八地説名不動。由一切相有功用行不能動故。何故九地説名善慧。由得最勝無礙智故。(大正藏卷三一・一四五頁下)

『成唯識論』卷第九

八無相中作加行障。謂所知障中俱生一分令無相觀不任運起。前之五地有相觀多無相觀少。於第六地有相觀少無相觀多。第七地中純無相觀。雖恒相續而有加行。由無相中有加行故未能任運現相及土。如是加行障八地中無功用道。故若得入第八地時便能永斷。彼永斷故得二自在。由斯八地說斷二愚及彼龜重。(大正藏卷三二・三三頁中)

〔典2〕 出典未詳。

【語註】

〔註1〕 不動地……菩薩十地の第八番目で、修行が完成しきつた状態を指す。精進せずに、自然と菩薩行が行われる状態をいう。

【第十問】 第十問云。菩薩具修諸解脱門。行法如何。

第十に問うて云く、「菩薩は具さに諸もろの解脱門を修す。行法は如何。」

第十に問う、「菩薩は具体的に諸もろの解脱の道を修める。その修行法はどのようなものか。」

謹対。然解脱門。有其多種。如花嚴經^{〔註1〕}。善財童子。百二十処。求善知識。一一皆為。說解脱門。事具經文。雖以備載。就本而証^{〔註2〕}。具說一種。若入此門。諸門皆具。謂一切法。皆不離心。若心離念。無所分別。心無罣礙。即心解脱。諸解脱門。從茲証得。

謹みて対う、「然り、解脱門は其れ多種有り。『花嚴經』に、善財童子の百二十処に善知識を求め、一一皆な為に解脱門を説くが如し。事は經文に具わり、備に載するを以てすと雖も、本に就いて証せば、具さには一種と説けり。若し此の門に入らば、諸門は皆な具わる。謂く、一切の法は、皆な心を離れず。若し心の念を離れ、分別する所無くば、

謹んでお答えします、「その通り、解脱の道には、多くの種類があります。『華嚴經』に、善財童子が百二十箇所に善知識を求め、一箇所一箇所どこでも解脱の道が説き示されたようなものです。表面的な事は經文に示されていて、十分に記載されているとはいっても、根本について証せば、具体的には一つであると説いています。もしこの道に

心に罣礙無く、即ち心解脱なりと。諸もろの解脱門は、茲こゝれにより証得さる。

入ったならば、他の諸もろの道はすべて具わるのです。すなわち、あらゆるものは、すべて心を離れていないのです。もし心が念を離れ、分別するところがなければ、心にさえぎるものになくなって、心が解脱すると言うのです。諸もろの解脱の道は、これによって悟ることができるのです。

故経偈云。若分別境相。即墮於魔網。^{〔註3〕}
不動不分別。是則為解脱。^{〔典1〕} 又経偈云。
相縛々衆生。亦由塵重縛。善双修止觀。^{〔註2〕}
方乃得解脱。^{〔典2〕}

故に「経偈」に云く、^{〔註3〕}若し境相を分別せば、即ち魔網に墮す。動ぜず分別せず、是れ則ち解脱と為す」と。又た「経偈」に云く、^{〔註2〕}相の縛は衆生を縛し、亦た塵に由りて重縛す。善く止と觀を双修せば、方乃はじめて解脱を得」と。

だから「経偈」に言います、^{〔註3〕}もし対象を分別したならば、魔網に墮ちる。心に動揺がなく分別することもない、これを解脱とする」と。また「経偈」に次のようにも言っています、^{〔註2〕}対象の束縛は人びとを束縛し、また煩惱の塵によって更に束縛される。よく止と觀を共に修めれば、始めて解脱を得る」と。

【校異】

※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。

※1 A、B本は「論」に作る。

※2 A本は「正」に作る。

※3 上山本は「万」に作る。

【出典】

〔典1〕 『別訳雜阿含經』卷第一二

動頭比丘尼復誦偈言。

此外諸異道 衆為邪見縛

種種諸見縛 終竟墮魔網

積種大世尊 無比之丈夫

一切種中勝 降魔坐道場

悉過一切上 諸事皆解脫

能調尽有辺 彼仏教於我

是我之世尊 我樂彼教法

我今知彼已 尽除諸結漏

断除一切愛 滅諸無明闇

逮得於滅尽 安住無漏法

以是故当知 波旬墮負処 (大正藏卷二・四五六頁中)

傍線部の取意か。

〔典2〕 『解深密經』卷第一・勝義諦相品第二

爾時世尊欲重宣此義。而説頌曰。

行界勝義相 離一異性相

若分別一異 彼非如理行

衆生為相縛 及彼鹿重縛
要勤修止觀 爾乃得解脱 (大正藏卷一六・六九一頁中)

【語註】

〈註1〉如『花嚴經』……『華嚴經』入法界品に説かれた求道の善財童子が、文殊菩薩に逢うことによつて発心し、普賢菩薩に逢うため南方へ旅に出かけたことをいう。旅中、五十三人の善知識に逢つたとされている。

〈註2〉就本……「本」は解脱門を指す。

〈註3〉魔網……悪魔が人々を束縛する際、様々な手段を講じる事を網に喩えたもの。

【第十一問】第十一問云。菩薩法身。与
仏法身。同不同者。

第十一に問うて云く、「菩薩の法身と
仏の法身とは、同じなるや同じならざ
るや。」

第十一に問う、「菩薩の法身と仏の法
身とは、同じなのであるか、違ふの
であろうか。」

謹対。大般若経最勝天会。所説法喩。
正与此同。今者謹依经文而説。最勝天
王。重白仏言。如来法身。菩薩法身。
如是二身。有何差別。仏告最勝天王。
当知。身無差別。功德有異。

謹みて対う、「『大般若経』最勝天会
に説く所の法喩は、正に此れと同じな
り。今は謹みて经文に依りて説かん。
最勝天王、重ねて仏に白して言く、『如
来の法身と菩薩の法身、是の如き二身
に何の差別有りや』と。仏、最勝天王
に告ぐ、『当に知るべし、身には差別無
きも、功德には異なり有り』と。

謹んでお答えします、「『大般若経』
最勝天会に説かれている法の喩えが、
正しくあなたが説かれたことと同じな
のです。今は謹んで经文に依つて説き
ましょう。最勝天王が重ねて仏に申し
上げた、『如来の法身と菩薩の法身と、
このような二身には、どのような差別
があるのか』と。仏が最勝天王に告げ
た、『当に知らなければならぬ、身体

身無別者。同一真如。無別体故。功德異者。由滿未滿。有差別故。菩薩法身。功德未滿。如來法身。功德已滿。譬如無価^{*2}未尼宝珠^{*3}。若未施功。瑩磨莊飾。与施功力。磨瑩莊嚴^{*4}。如是二相。雖有差別。而其珠体。即無差別。当知此中。道理亦爾。同不同義。如經可知。

〈身には別無し〉とは、同一の真如にして、別の体無きが故なり。〈功德には異なりあり〉とは、満つると満たざるとに由りて、差別有るが故なり。菩薩の法身は、功德未だ満たざるも、如來の法身は、功德已に満ちたり。譬えば無価の未尼宝珠の如し。未だ功を施して瑩磨・莊飾せざると、功を施して力めて磨瑩・莊嚴するとの若し。是の如き二相には、差別有りと雖も、其の珠の体には即ち差別無し。当に知るべし、此の中の道理も亦た爾り。同じと同じならざるとの義は、經の如くなるを知るべし。」

には差別はないけれども、功德には違いがあることを」と。

〈身体には区別がない〉とは、(法身は)同一の真如であつて、別の本質がないからです。〈功德には違いがある〉とは、満ちているか満ちていないかによつて、差別があるからです。菩薩の法身は、功德がまだ満ちていないけれども、如來の法身は、功德がすでに満ちているのです。これを譬えるならば、たとえようもなく価値の高い未尼宝珠のようなものです。まだ人が努力して磨き瑩かせたり、裝飾したりしないものと、努力して磨き瑩かせたり、裝嚴したりしたものとの違いのようなものです。このような二つのありようには、差別があるといつても、その珠の本質には差別はないのです。当に知らなければなりません、あなたの問われたこととの道理も、またその通りなのです。同じか違うかの意味も、經典に説かれ

「ているように理解すべきです。」

【校異】

- ※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 底本は「身」に作るも、A、B本により「是」に改む。
- ※2 B本は「価値」に作る。
- ※3 底本は「未」に作るも、A、B本により「末」に改む。
- ※4 底本は「工」に作るも、A、B本により「功」に改む。
- ※5 A本は「飾」に作る。

【出典】

〔典1〕 『大般若波羅蜜多經』卷第五六八・第六分法界品第四之二

於是最勝復白仏言。仏菩薩身豈無差別。仏告最勝。天王当知。身無差別功德有異。其義云何。謂仏菩薩身無差別。所以者何。以一切法同一性相。功德異者。謂如来身具諸功德。菩薩不爾。吾当為汝略說譬喻。譬如宝珠若具莊飾不具莊飾其珠無異。仏菩薩身亦復如是。(大正藏卷七・九三二頁下)

【語註】

〔註1〕 末尼宝珠……摩尼珠、摩尼宝珠とも言う。悪事や災難を遠ざける徳があるとされている。

【第十二問】第十二問云。菩薩涅槃。及与輪廻。並不分別。義如何者。

第十二に問うて云く、「菩薩は涅槃と輪廻とを、並べて分別せず。義は如何。」

第十二に問う、「菩薩は涅槃と輪廻とを全く分別しない。それはどのような意味であろうか。」

謹対。夫見涅槃。由執生死。不見生死。何執涅槃。既都無見^{*2}。於何分別。

且如^{*3}二乘。未離法執。不了諸法。皆從念生。執有離心。生死苦法。見身心外。別有涅槃。執涅槃故。妄起欣求。著生死故。妄生厭離。是故欣厭。皆是妄心。其猶怖夢^{*4}。虎而生嫌。翫空花而自樂。

謹みて対う、「夫れ涅槃を見るは、生死に執するに由るなり。生死を見ざれば、何ぞ涅槃に執せん。既に都て見ること無くば、何に於てか分別せん。」

且如^{たとえ}ば二乗は未だ法執を離れず、諸法は皆な念従り生ずるを了らず。心を離れて生死の苦法有りと執す。身心の外に別に涅槃有りと見て、涅槃に執するが故に、妄りに欣求を起す。生死に著するが故に、妄りに厭離を生ず。是の故に欣も厭も、皆な是れ妄心なり。其れは猶お夢に虎を怖れて嫌を生じ、空花を翫びて自ら楽しむがごとし。

謹んでお答えします、「涅槃を見るのは、生死に執著することに由るのです。生死を見なければ、どうして涅槃に執著することがありましょうか。既に全てを見ることのないならば、何に對して分別することがありましょうか。」

たとえば、二乗は未だ諸もろの存在に對する執著から離れられず、諸もろの存在はすべて心の念いから生ずることを理解しないのです。心を離れて生死の苦というものがあると執著するのです。自らの身心の外に別に涅槃が有ると見て、その涅槃に執著するために、妄りに願ひ求める念いを起してしまふのです。生死に執著するために、妄りに厭い離れようとする念いを起してしまうのです。だから願ひ求めるのも厭い離れようとするのも、皆な妄心なのです。それはまるで夢に見た虎を怖れて、虎を忌み嫌ったり、空花をもてあそんで独り楽しんでるようなも

菩薩了達。照見心源。生死本空。亦何所厭。涅槃無相。於何所欣。了空無相。心念不生。輪廻涅槃。故不分別。

菩薩は心源を照見し、生死の本とよ
り空なるを了達せば、亦た何をか厭う
所あらんや。涅槃には相無し、何に於
てか欣う所あらんや。空・無相を了ら
ば、心念は生ぜず、輪廻と涅槃とを、
故に分別せず。」

のです。

菩薩は心の本源を諦めて、生死の本
来空であることを理解しているから、
最早何かを厭うことがありえましよう
か。涅槃には姿形はありません、何に
対して願い求めることがありえましよう
か。空や無相を悟ったならば、心の
念いは生ずることなく、輪廻と涅槃と
を、わざわざ分別しないのです。」

【校異】

- ※この段はA、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 A本は「転」に作る。
- ※2 B本は「無」を欠く。
- ※3 底本は「如」を欠くも、A、B本により「且」を補う。
- ※4 A、B本は「由」に作る。
- ※5 A、B本は「可」に作る。
- ※6 B本は「想」に作る。

【第十三問】第十三問云。菩薩所知。不著涅槃。不染世間。依何法者。

第十三に問うて云く、「菩薩の知る所
は、涅槃に著せず、世間に染まらずと。

第十三に問う、「菩薩の悟っているこ
とは、涅槃にも執著しないし、俗世間

何れの法に依るや。」

謹対。菩薩了知。法從縁起。如幻如化。非久非堅。既知諸法。虚妄不真。何彼世間註3法所染汚。此依初教註1。作縁起註2觀。知世如幻。能不染也。

若能了達。一切唯心。法從心生。心外無法。今所見者。但見自心。離心註4之外。都無所見。既無外法。何染世間註3。此依終教註3。作唯識觀註4。乃能不染世間法也。

謹みて対う、「菩薩の了知するは、法は縁起に従りて、幻の如く化の如く、久しきに非ず堅にも非ざるなり。既に諸法の虚妄にして真ならざるを知らば、何ぞ彼の世間の法に染汚せらるるや。此れは初教に依りて、縁起觀を作し、世の幻の如くなるを知りて、能く染まらざるなり。」

若し能く一切は唯だ心のみにして、法は心従り生じ、心の外に法無きを了達せば、今、見あらわゆる所は、但だ自心を見わすのみなり。心を離るるの外は、都て見あらわゆる所無し。既に外の法無く

にも染まらないということである。それはどのような教えによるのであろうか。」

謹んでお答えします、「菩薩が了あきらかに悟っているのは、あらゆるものが縁起に従るのであって、幻の如くはかないものであり、永遠のものでもなく堅固なものでもありません。既にあらゆるものが虚うつろであって実ではないことを知っているのだから、どうして俗世間のものに染汚されることがありましようか。これは初教によって縁起の觀方をしたものであって、俗世間が幻のようなものであることを知って、俗世間に染まらなくなるのです。」

もしあらゆるものが唯だ心のみであつて、あらゆるものがその心から生じ、心の外には何物も無いことを明らかに悟るならば、今、見あらわれているものは、但だ自らの心を見わすだけなのです。

若了境界^{*5}。唯是自心。外境既無。内^{*6}
心何見。心既無見。念本不生。一切皆
如^{*7}。何所染汚。此依頓教^{〔註5〕}。作真如觀^{〔註6〕}。
則於世法^{*8}。無能所染。

ば、何ぞ世間に染まらんや。此れは終
教に依りて唯識觀を作し、乃ち能く世
間の法に染まらざるなり。

若し境界の、唯だ是れ自心のみなる
を了ぜば、外境は既に無く、内心、何
ぞ見^{あら}われん。心、既に見わること無
くば、念、本^もとより生ぜず。一切は皆
な如^にならば、何ぞ染汚せらるるや。此
れは頓教に依りて真如觀を作し、則ち
世法に於て能く染めらるること無し。

自らの心を離れた以外には、何も見わ
れるものは無いのです。既に自らの心
の外には何物もないのだから、どうし
て俗世間に染まることがありえましょ
うか。これは終教によって唯識の觀方
をしたのであって、それによって、世
間のあらゆるものに染まることなく
なるのです。

もし対象の世界が、唯だ自らの心だ
けであることを悟るならば、外の対象
の世界は、本より何もないのであり、
内の心もどうして見わたることがあり
えましようか。心が既に見わたれないの
だから、念いも本より生ずることがな
いのです。あらゆるものが全てあるが
ままであるのだから、どうして染汚さ
れることがありえましようか。これは
頓教によって真如の觀方をしたもので
あって、俗世間にあつては何も染まる
ことがなくなるのです。

既知世法。一切皆如本来涅槃。何所
取著。雖在世間。世法不染。雖得涅槃
而不樂著^{*}。即是無住^{〔註7〕}大般涅槃。

既に世法の、一切皆な本来涅槃の如
くなるを知らば、何に取著せらるるや。
世間に在ると雖も、世法に染まらず。
涅槃を得ると雖も、樂著^{ねが}わず。即ち是
れ無住の大般涅槃なり。

是故菩薩。依此三種。所說法門。無
染著也。

是の故に菩薩は、此の三種の説く所
の法門に依りて、染著すること無し。」

既に俗世間の法が、全て本来涅槃の
ようであることを知ったならば、何も
のに執著されることがありましよう
か。俗世間に住んでいるといっても、
俗世間の法に染まることはないので
す。涅槃を得るといっても、それを樂
うこともないのです。これを無住の大
般涅槃^{はつねはん}というのです。

このようなわけだから菩薩は、今ま
で説いてきた三種の教えによって、染
汚されたり執著したりすることがない
のです。」

【校異】

- ※この段は、A、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 B本は「云」を欠く。
- ※2 A本は「善」に作る。
- ※3 底本、B本は「被」に作るも、A本により「彼」に改む。
- ※4 A本は「心」を欠く。
- ※5 A本は「竜」に作る。
- ※6 A本は「心内」に作る。

※7 A本は「知」に作る。

※8 A本は「間」に作る。

※9 A、B本は「着」に作る。

【語註】

〈註1〉初教……一般的な大乘をいう。

〈註2〉縁起觀……因縁觀ともいう。あらゆるものが因と縁によつて生起していると觀ずること。

〈註3〉終教……大乘の終極の教え。真如縁起・一切皆成仏を説く。

〈註4〉唯識觀……あらゆるものが唯だ識、すなわち心であると觀ずること。

〈註5〉頓教……釈尊が悟つた直後の高次な教えを、直接的に説くこと。

〈註6〉真如觀……あらゆるものがあるのままなる真実の姿であると觀ずること。

〈註7〉無住大般涅槃……迷いの世界にも留まらず、また大慈悲心によつて衆生救済のために迷いの世界で活動するので、悟りの世界にも留まらないこと。

【第十四問】第十四問云。^{※1}又大乘法。智恵方便二種双行。衆生欲行。如何起行。菩薩自在。則可能行。^{※2}衆生不然。何能行者。

第十四に問うて云く、「又大乘法の法とは、智恵と方便の二種の双行なり。衆生、行ぜんと欲ば、如何に行を起さんや。菩薩は自在なれば、則ち能く行すべきも、衆生は然らず。何に能く行ずるや。」

第十四に問う、「また大乘の法おしえというのは、智恵と方便の二つが同時にはたらくことである。衆生がこの二つの行をはたらかそうとするならば、どのように行を起せばいいのか。菩薩は自在の境地にいるから、これら二つを行ずることができけれども、衆生はそうではない。どのように行ずればよいの

謹対。此中義理^{*3}。意趣難知^{*4}。若不審詳。詎申^{*5}妙旨。今於此中。略述兩解。

謹みて対う、「此の中の義理と意趣は知り難し。若し審詳せざれば、詎ぞ妙旨を申べん。今、此の中に於て兩解を略述せん。

一云。大乘之法。有俗有真。俗則諸法。若有若空。真謂都無。空之與有。為照空有。智惠要存。為泯有空。方便須立。照空有故。俗智得生。泯空有故。真智成就^{*6}。若唯照俗。未免輪廻。若但觀真。不起悲濟。照俗之行。由智慧成。証真之功。由方便得。智慧方便。故要双行。若闕^{*7}一門。不達二諦。

一に云く、大乘の法には、俗有り真有り。俗とは則ち諸法の、若しくは有、若しくは空なり。真とは謂く、都て空も有も無し。空と有を照らさんが為に、智惠の存するを要す。有と空を泯さんが為に、方便を須く立つべし。空と有を照らすが故に、俗智生ずるを得。空と有を泯さんが故に、真智成就す。若し唯だ俗を照らすのみならば、未だ輪廻を免がれず。若し但だ真を觀するのみならば、悲濟を起こさず。俗を照らすの行は、智慧に由りて成じ、真を証る

か。」

謹んでお答えします、「大乘の法の中に説かれた教理と意図はなかなか知ることが難しいのです。もしこれを詳しく参究しなければ、どうしてその妙なる趣旨を述べることができましょう。今、大乘の法の中にある二つの見解を略して述べることに致しましょう。

一つめの見解は、大乘の法の中には、世俗もあれば真実もあります。世俗とは、すなわち諸法が、有であったり空であったりすることです。真実とは、空も有もすべて存在しないことです。空と有のあることを明らかにするためには、智惠が必要なのです。有と空を泯すために、方便を立てなければならぬのです。空と有を明らかにするから、世俗の智慧の生ずることができるので、空と有が泯されるから、真実の智慧が成就するのです。もしただ世俗だ

の功は、方便に由りて得。智慧と方便は、故に要かならず双行すべし。若し一門を闕かば、二諦に達せず。

二云。大乘之法悲智双行。自行化他。闕一不可。若無自行。不異凡夫。如不化他。乃同小聖。此中智慧。即是自行。以实智慧。証真如故。言方便者。即是化他。以權方便。化衆生故。鳥具二翼。乃得翔空。車有兩輪。方能載陸。

二に云く、大乘の法は悲と智の双行なり。自行と化他、一を闕くも不可なり。若し自行無くば、凡夫に異ならず。如し化他せざれば、乃ち小聖に同じなり。此の中の智慧とは、即ち是れ自行なり。実の智慧を以て、真如を証まるが故なり。方便と言うは、即ち是れ化他なり。方便を権かりて衆生を化するを以ての故なり。鳥は二翼を具そなえて、乃ち空を翔とぶを得。車は兩輪有りて、方はめ

けを明らかにするならば、輪廻の世界から抜け出すことはできません。もしただ真実だけを観るならば、慈悲による救済を起こすことはできません。世俗を明らかにするための行は、智慧によって完成し、真実を悟ることの功德は、方便によって得られるのです。智慧と方便とは、それ故にかならず二つ同時にはたらくことが必要なのです。もし一方を闕かくならば、(真俗の)二諦に達することはできないのです。

二つめの見解は、大乘の法では慈悲と智慧とが二つ同時にはたらくことです。自行も化他も、いずれか一つを闕かいてはならないのです。もし自行をしないならば、凡夫と変わりません。もし化他をしないならば、小乗の聖者と同じです。この中の智慧とは、自行のことです。真実の智慧によって、真如を悟るからです。方便というのは、化他のことです。仮りに方便によって、

て能く陸に載る。

衆生を教化するからです。鳥が二つの翼を備えていて、始めて空を飛ぶことができるのであり、車は両輪があつて、始めて陸を走ることができるようなのです。

既知^{※8}智恵方便二門。凡夫欲行。但依此理。不能依学^{※9}。即是凡夫。若能修行。是称菩薩。凡夫不学。是繫縛人。菩薩能行。成自在者。妄先修学。成自在人。非先自在。然後修学^{註1}。故凡夫者。亦能修行。

既に智恵と方便の二門を知れり。凡夫は行ぜんとするに、但だ此の理に依るのみにして、学に依ること能わらず、即ち是れ凡夫なり。若し能く修行せば、是れを菩薩と称す。凡夫学ばざれば、是れ繫縛の人なり。菩薩能く行ぜば、自在を成ずる者なり。妄りに先に学を修めて、自在を成ずる人は、先に自在にして、然る後に学を修むるには非ず。故に凡夫も亦た能く修行せん。」

既に(あなたは)智恵と方便の二つの教えを理解されました。凡夫はこれらを行じようとするのに、ただ理論によるだけで、実践によることができないのです。これこそが凡夫なのです。もしよく実践するならば、これこそが菩薩と云うのです。凡夫は実践をしないから、繫縛の人となるのです。菩薩はよく実践するから、自在の境地を得る者となるのです。正しい法によらないで、先ず修行して、自在の境地を得る人は、先ず自在の境地にあつて、その後修行するのではないのです。だから、凡夫もまたよく修行しなければなりません。」

【校異】

- ※この段は、A、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 B本は「云」を欠く。
- ※2 A本は「可」を欠く。
- ※3 A本は「中」を欠く。
- ※4 A本は「取」に作る。
- ※5 A、B本は「身」に作る。
- ※6 A本は「如」、B本は「知」に作る。
- ※7 底本は「開」に作るも、B本により「闕」に改む。
- ※8 底本は「知」を欠くも、A、B本により補う。
- ※9 A本は「孝」に作る。

【語註】

〔註1〕妄先修学。成自在人。非先自在。然後修学……前半の「妄先修学。成自在人」が「声聞・縁覚」を指し、後半の「(非)先自在。然後修学」が「菩薩」を指し、声聞・縁覚と菩薩の立場の相違を示したもの。(以下続く)